長谷川 章
AKIRA　HASEGAWA

ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

――ドイツ世紀転換期のユートピア思想と『ヨハネの黙示録』

Bruno Taut "Die Stadtkrone" und die Gedankenwelt der Apokalypse
――Die utopische Ideen in der Jahrhundertwende und "Die Offenbarung des Johannes"

●抄録

本論文は2019年度教育研究助成金による「ドイツ田園都市の成立に関する研究その⑹ドイツ田園都市とドイツ敬虔主義」の研究成果に基づくものである。ドイツ文化を基礎付けているプロテスタンティズムに着目し、ドイツ田園都市を再検証することを目的としている。プロテスタンティズムが都市と関係を持つのは黙示録思想においてである。それを明らかにするため『ヨハネの黙示録』が生み出された紀元１世紀から近代へいたる黙示録思想の歴史を俯瞰し、どのように都市が黙示録思想から影響を受けたのか改めて検証した。その結果ブルーノ・タウトの『都市の冠』が黙示録思想のなかに位置付けられることを明らかにした。それによりドイツ近代史における全く新しいタウト像を提示することができた。本論文は２部５章から構成されている。

第Ⅰ部 黙示録文学と千年王国思想は３章から構成されている。第１章『ヨハネの黙示録』の成立。古代ユダヤ民族の救済史としての旧約聖書から生み出された新約聖書である『ヨハネの黙示録』とキリスト教の関係を詳述した。第２章 黙示録文学の成立と垂直のユートピア。『ヨハネの黙示録』ではユダヤ民族救済の歴史が捨象され、全人類の救済史としての黙示録文学へ昇華されたキリスト教が生み出された。それまで地上の彼岸に求められていた水平のユートピアは、『ヨハネの黙示録』により天上から降臨してくる垂直のユートピアへ読み換えられた。第３章 千年王国思想と黙示録。古代ユダヤ教からキリスト教へ至る歴史におけるユートピアとしての楽園あるいは天国の系譜から、どのように千年王国思想が形成されたのか検証した。そして『ヨハネの黙示録』の終末思想のなかに位置付けた。

第Ⅱ部 ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想は２章から構成されている。第４章 ドイツ表現主義と黙示録思想。ヨーロッパでは第一次世界大戦という世界の終末に黙示録思想が復活した。ドイツ近代芸術運動であるドイツ表現主義を黙示録思想から解釈しなおし、モダニズムの概念を再検証した。第５章 ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想。1916年から構想され1919年に出版されたブルーノ・タウトの『都市の冠』は建築の黙示録である。彼の田園都市は『ヨハネの黙示録』でヨハネが幻視した天上の新イェルサレムと同じ空間構造から構築されていることを明らかにした。

目次は以下のとおりである。

第Ⅰ部　黙示録文学と千年王国思想

第１章　『ヨハネの黙示録』の成立

第１節　『ヨハネの黙示録』とは何か

１．ヨハネの時代と『ヨハネの黙示録』

２．『ヨハネの黙示録』の構成

３．『ヨハネの黙示録』の特徴

４．『ヨハネの黙示録』の源泉

第２章　黙示録文学の成立と垂直のユートピア

第１節　黙示録文学としての『ヨハネの黙示録』

１．黙示録文学の成立

２．黙示録文学の形式

第２節　水平のユートピアと垂直のユートピア

１．水平のユートピア

２．垂直のユートピア

第３章　千年王国思想と黙示録

第１節　世界の終末と千年王国思想

１．千年王国思想の成立

２．千年王国へ至る終末のプロセス

３．前千年王国思想と後千年王国思想

４．降臨しなかった千年王国

第Ⅱ部　ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

第４章　ドイツ表現主義と黙示録思想

第１節　第一次世界大戦と終末思想

１．近代へ生き延びた黙示録思想

２．千年王国としてのワイマール共和国

第２節　ドイツ表現主義と黙示録思想

１．第一次世界大戦とドイツ表現主義

２．ドイツ表現主義と黙示録思想

第５章　ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

第１節　シェーアバルトの黙示録

１．ヤン･ファン･エイクの《聖女バルバラ》(1437)

２．シェーアバルトの「建築の黙示録」

３．シェーアバルトの「死の宮殿」

第２節　バロンとベーネの精神世界

１．バロンの「再構築」

２．ベーネの「建築芸術の再生」

第３節　ブルーノ・タウトの『都市の冠』(1919)

１．「頭なき胴体」から「都市の冠」へ

２．「都市の冠」と田園都市

第４節　黙示録の都市としての『都市の冠』

１．「歴史的な都市の冠」と新イェルサレム

２．『都市の冠』と都市の黙示録

３．ブルーノ・タウトと黙示録思想

４．新イェルサレムとしての色彩建築

５．『都市の冠』から『アルプス建築』へ

図29　『アルプス建築』第26葉「大聖堂の星」
ブルーノ・タウト、1919年

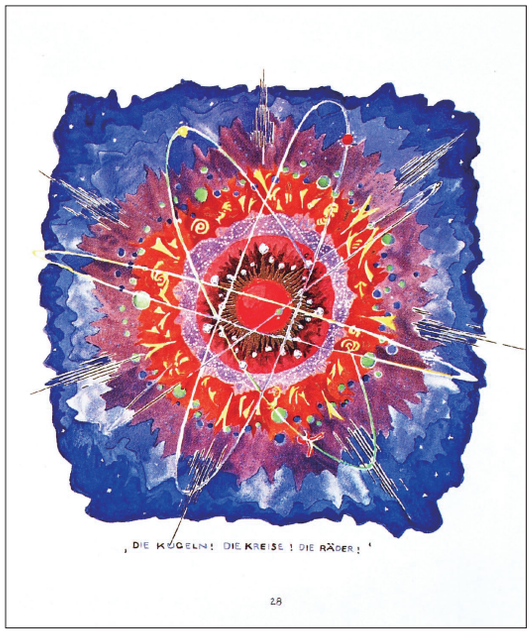


図30　『アルプス建築』第28葉「球体！　円環！　車輪！」
ブルーノ・タウト、1919年

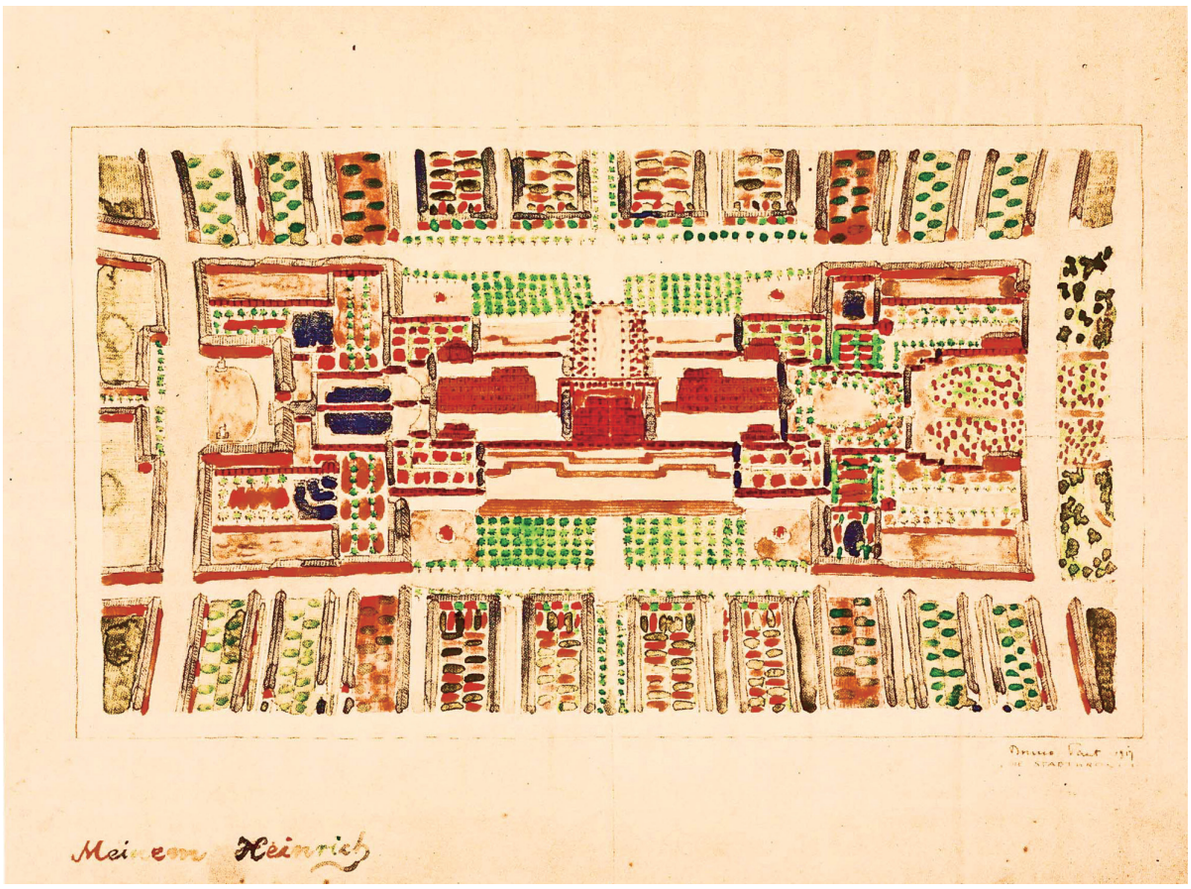


図28　「都市の冠」中心部　斜投影図　息子ハインリヒのために彩色された都市の冠
ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

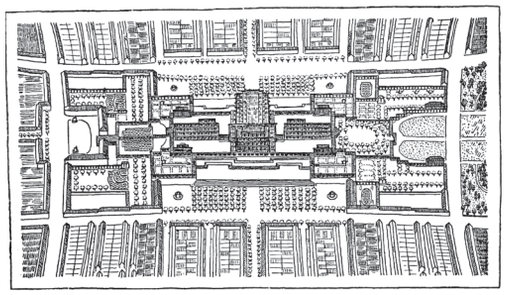
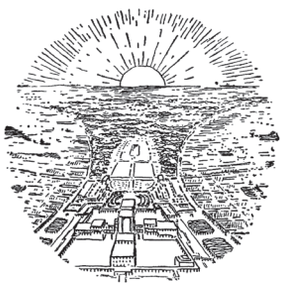


図19-8　「都市の冠」中央部斜投影図　1919年
設計　ブルーノ・タウト



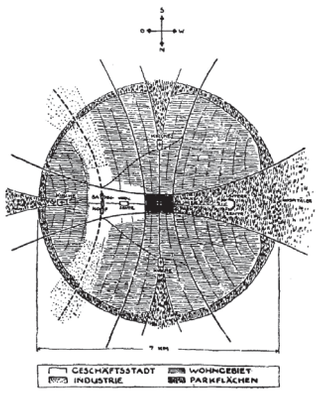


図19-1（左）「都市の冠」西側からの鳥瞰図　1919年
設計　ブルーノ・タウト
図19-2（右）「都市の冠」都市全体図　1919年
設計　ブルーノ・タウト

図19-3 「都市の冠」 透視図　ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

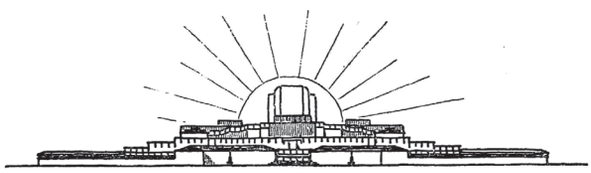


図19-4 「都市の冠」中心部　西側立面図
ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

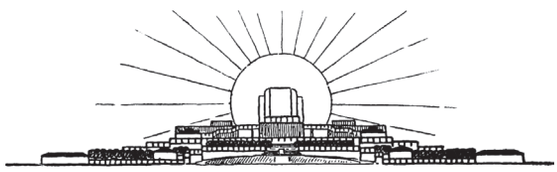


図19-5 「都市の冠」中心部　東側立面図
ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

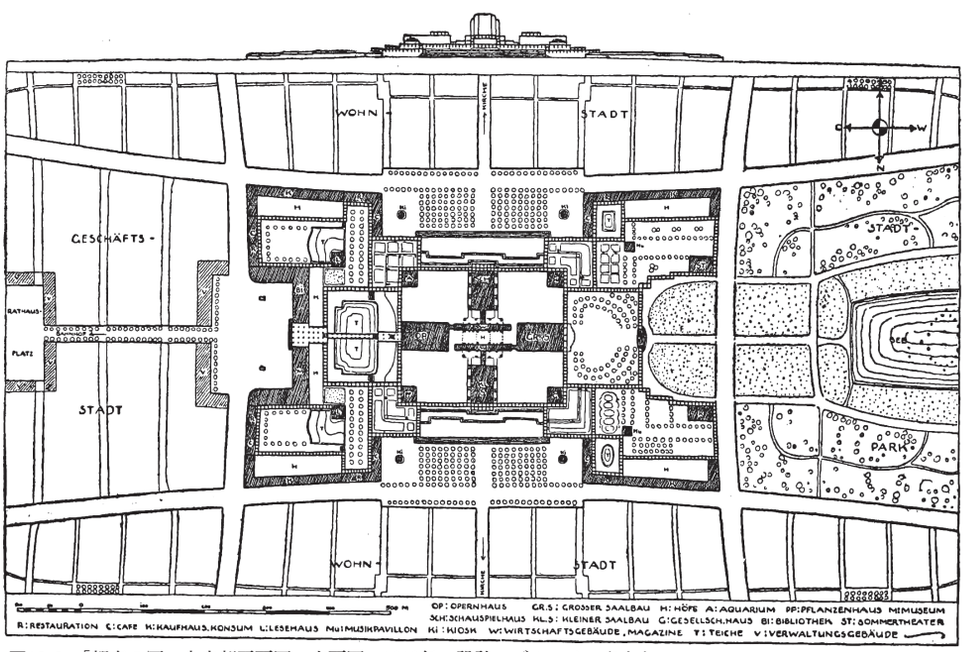


図19-6 「都市の冠」中央部平面図、立面図　1919年　設計　ブルーノ・タウト

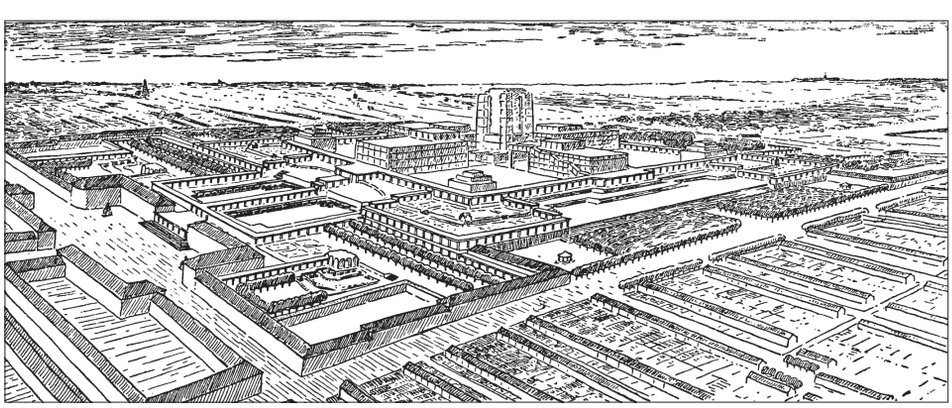


図19-7 「都市の冠」中央部分透視図　1919年　設計　ブルーノ・タウト

第Ⅰ部
黙示録文学と千年王国思想

ヨーロッパの近代思想ならびに哲学ばかりではなく、ひろく文化を語るときに思い知らされるのはキリスト教が全ての基盤となっていることである。キリスト教の聖書のなかでも新約聖書の『ヨハネの黙示録』が後世に与えた影響は、他の福音書と比較にならないほど大きい。『ヨハネの黙示録』の記述の多くは旧約聖書すなわちユダヤ教の予言書から引用されたものであることが知られている。第Ⅰ部では旧約聖書と『ヨハネの黙示録』との関係を論じる。そして『ヨハネの黙示録』における終末思想と世界の終末に降臨する千年王国との関係について明らかにする。

第１章
『ヨハネの黙示録』の成立

ユダヤ教の旧約聖書とは予言の書である。そして新約聖書とは旧約聖書の予型である。その両者の交点にあって歴史的な関係性を媒介しているのが『ヨハネの黙示録』であるといえよう。なぜならば『ヨハネの黙示録』は新約聖書のなかでも最も旧約聖書である予言書との結び付きが強いからである。『ヨハネの黙示録』は紀元前６世紀の『エゼキエル書』や紀元前２世紀の『ダニエル書』のなかから多くの神の啓示を読み取っている。それを未来の救済へ向かう終末思想として解釈しなおしている。逆説的ではあるが、キリスト教は黙示録において初めて理解され意味を獲得しているのだ。

第１節　『ヨハネの黙示録』とは何か

黙示録はユダヤ民族の救済史としての歴史書ではない。黙示録はユダヤ民族の歴史に依拠した救済史から脱却している。すなわち普遍化された救済の世界観を記述したものとなっている。その結果『ヨハネの黙示録』は予言書という形式をとりながらもそのアレゴリーとして一つの文学的なジャンルにまで昇華されたものとなっている。この予言書である黙示録は紀元前３世紀から紀元後２世紀の期間に数多く出現している。そのなかでも代表的かつ最初に書かれた黙示録が『ヨハネの黙示録』である。黙示録とは神に導かれた人類の歴史である。その歴史の未来に訪れる終末に現世を越える意味を与えている。『ヨハネの黙示録』はこのような文学形式を樹立したという意味においても歴史的に重要なものとなっている。

１．ヨハネの時代と『ヨハネの黙示録』

『ヨハネの黙示録』は紀元１世紀ころにコイネーと呼ばれたギリシア語で書かれた。それを書いたのはヨハネ自身とされている。すなわち他の黙示録では本人が記したものではない場合が多い。ではこの『ヨハネの黙示録』を書いたヨハネとはいかなる人物なのだろうか。

ヨハネの名前を冠した福音書が新約聖書にある。この『ヨハネの福音書』の著者とそれ以前に書かれた『ヨハネの黙示録』のヨハネが同一人物であるかどうかは現在も議論されている。その理由はその他の聖書のように『ヨハネの福音書』は洗練された慈愛に満ちた表現に終始している。それに対して『ヨハネの黙示録』の表現では憎悪に満ちているからである。野蛮ながら神話的な雰囲気に満たされた世界の終末の描写が『ヨハネの黙示録』を特徴付けている。(注１)

『ヨハネの黙示録』が書かれたのはローマ帝国のドミティアヌス帝治世の時代（81-96）である。まだキリスト教が異教とされていた時代であり、信徒にとっては最も過酷な時代であった。ヨハネはそれから逃れるように地中海のパトモス島へと移った。そこで世界の終末を自覚しながらヨハネが書いた予言書が『ヨハネの黙示録』とされている。パトモス島は当時のキリスト教の予言者たちがローマ帝国の迫害から逃れるためのアジールのような場所であったようである。［図１］

図1　ヨハネが『ヨハネの黙示録』を書いたパトモス島と七つの教会
筆者作成

70年にイェルサレムはローマ帝国により陥落し110万人のユダヤ人が虐殺されている。この壊滅的な民族の状況に救世主到来への期待が昂まっていた。「終末のあとに新しい世界が来る」という予言者の言葉に最後の望みを託す人々がいた。それから25年後に『ヨハネの黙示録』が生まれている。

こうして誕生した『ヨハネの黙示録』を読むと、他の福音書とは全く異なった印象を受ける。その理由は異教的な世界の描写にある。アッシリア人あるいはカルデア人などの東方の神話的世界なのであろうか。そこには獣が跋扈する幻視の世界がしるされている。それが物語るのは、地の底に埋もれていた異教の文化の持つコスモスなくしてこの世界を徹底的に破壊することができないということである。それはユダヤ教や原始キリスト教の世界とは異なる。明らかに異質の神話的世界であった。(注２)

２.『ヨハネの黙示録』の構成

『ヨハネの黙示録』とは回覧のための書簡であった。小アジアでローマ帝国の迫害に苦しむ七つの教会に宛たものだ。アジア州は紀元前27年以降元老院属州となり皇帝崇拝が盛んな地である。しかし文面からはその迫害よりも、世俗化に対する批判と警告に重きが置かれていることが分かる。すなわちニコライ派やバラム派そしてイゼベル党が教会の秩序を乱していることへの杞憂が述べられている。(注３)しかし本論が注目しているのは『ヨハネの黙示録』のこの手紙を除いた部分である。その八割を占めて展開されている後半の幻視の世界の記述である。特に注目しているのは、最後の第21章と第22章である。それは救世主イエス・キリストが約束した「神の国」の降臨の予言の部分に該当する。

『ヨハネの黙示録』は全体が22章から構成されている。その構成と内容を俯瞰してみよう。第１章から第３章にわたり七つの教会への手紙が記されている。それは文体においても内容においてもそれ以降の４章から22章までの部分と大きく異なる。手紙に続く第４章は天界の世界が描写されている。第５章から第７章までは小羊と七つの封印について書かれている。第７章から第10章までは天使のラッパが鳴るとともに始まる神の裁きについて書かれている。第11章には七つの幻視について書かれており、第15章へとつながっている。第12章から第14章はその間に挿入されたものであり、信徒の運命について書かれている。第15章と第16章には神の怒りによる世界の崩壊について書かれており、それに続く第17章から第19章にはバビロニアの滅亡が書かれている。第20章には反キリストであるサタンの解放について書かれている。そして最後の第21章と第22章には天上から降りてくる「神の国」としての新イェルサレムについて書かれている。

３.『ヨハネの黙示録』の特徴

『ヨハネの黙示録』を特徴付けているのは獣が跋扈する幻視の世界である。それは東方の異教から由来したものと考えられている。とくに後半において展開されている幻視の記述は、古代ペルシアの神話に由来したものといわれている。海の怪物を神が退治する神話である。(注４)

第12章以降には合計四頭の獣が登場してくる。それはサタンのように反キリストとして世界が終末を迎えるときに登場するものである。この四頭の獣とは暗にバビロニア、メディア、ペルシアそしてローマ帝国を意味している。『ダニエル書』では四番目のローマ帝国はギリシアと記されていたが、時代がかわり『第四エズラ書』からローマ帝国へと修正された。(注５)第14章の「大バビロンが倒れた」という表現は、ローマ帝国が崩壊したことを意味する。第18章でのバビロニアすなわちローマ帝国の崩壊の記述は、『創世記』のバベルの塔の崩壊を範典として描かれたものである。

第13章と第17章に登場する獣は七つの頭を持っている。これはローマを支配した七人の皇帝を意味している。十本の角はパルティアの諸王と解釈されている。[図２]

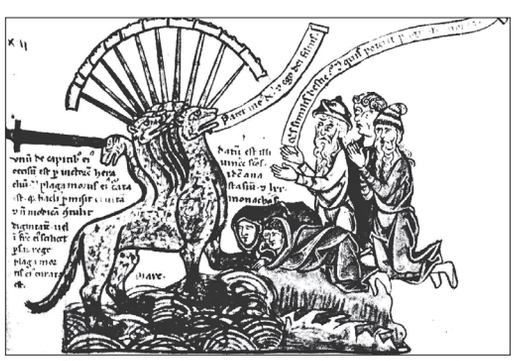


図2　「第一の獣の礼拝」アレキサンダー注釈書、13世紀後半
十本の角と七つの頭をもった獣が海からあがってくる。獣の頭の一つは傷を受けて死にかけているようにみえるが、その致命的な傷は治ってしまう。人々はこの獣を崇拝した。獣の角には冠があり、それには神を冒涜する言葉が書かれている。

そして最後の第21章と第22章において世界の終末に降臨する新イェルサレムについて記述されている。ここでヨハネは「聖都イェルサレムが神のもとから地上へと、天から降ってくるのを見せてくれた。」(21:10)と記している。これは何を意味するのであろうか。ユダヤ教が生まれた目的とはユダヤ教の神殿とイェルサレムの再建にあった。それは具体的な地上の都市と建築の建設を意味する。しかし『ヨハネの黙示録』には「天から降ってくる」と書かれているのである。それは『マルコの福音書』の記述に符合している。すなわち「わたしは手で造られたこの神殿を壊し、三日後に手で造られない別の神殿を建てて見せる」(14:58)とキリストが言ったと書かれているのだ。これは、新イェルサレムという世界の終末に訪れる至福の千年王国は、ユダヤ教におけるように人間が造り上げるものではないということを意味している。神がすでに造った天上の都市が、天から降って地上に現れるのである。(注６)

理想都市である新イェルサレムに関する記述は次のことを明らかにしている。すなわちユダヤ民族の救済という具体的な救済思想から、キリスト教の宇宙論的な人類の救済史へ転換したことである。ここで重要なことは、地上のイェルサレムという具体的な都市が、聖書に記述された世界へと読み換えられてしまっていることだ。さらに言えばこの新イェルサレムという都市は信徒が救済されて天使として住むところである。すなわちこの都市は聖なる者たちが栄光を携えて参集する信仰共同体が具現化されたものなのである。地上におけるキリスト教会が天上に投影されたものが新イェルサレムである。『イザヤ書』には天上の新イェルサレムは「神と小羊が都の神殿である」(21:22)と記されている。すなわち神殿よりも信仰共同体がまさるものであることがここに明らかにされている。ユダヤ教では神殿がイェルサレムにあった。しかし天上の新イェルサレムには神殿が存在しないのである。このようにしてキリスト教では脱ユダヤ教が徹底されている。そして全人類の救済思想へと普遍化されていったのだ。(注７)

４．『ヨハネの黙示録』の源泉

『ヨハネの黙示録』はヨハネ自身が書いたものとされている。全体は405節から構成されている。しかしそのうち278節が旧約聖書からの引用である。数え方にもよるが直接の引用は200ヶ所、間接的な引用は500ヶ所にものぼるとされている。これが示すことは『ヨハネの黙示録』は旧約聖書との結び付きが強いということである。その旧約聖書とはユダヤ民族の終末思想である。(注８)

たとえば『ヨハネの黙示録』の天上の新イェルサルムの記述は紀元前６世紀の『エゼキエル書』からの引用であることが指摘されている。この時代、すなわちユダヤ民族がペルシア帝国の支配下にあった時代には、東方の異教からの影響の可能性が考えられている。

『ヨハネの黙示録』の第６章の七つの封印や四色の馬の記述は『ゼカリヤ書』からの引用である。龍が天から投げ落とされる記述は紀元前２世紀の『ダニエル書』の第７章を素材としている。また四頭の獣については『第四エズラ書』から、二頭の怪物については『第一エノク書』の第60章からの引用である。また第13章の信徒への語り掛けは『エレミア書』の第15章に素材を得ている。(注９)

『イザヤ書』の第24章から第27章にかけて新天新地の世界が詩的に展開されている。これは黙示録に特異な終末や審判、破壊と救済そして復活と再生について記したものである。また『ダニエル書』では第７章以降が黙示録となっている。ここには救世主が天から降りてくる描写が認められる。(注10)

『エゼキエル書』では第34章から救済の予言が書かれており、第37章からはキリストの復活の思想が記されている。また第40章から第48章にかけてエゼキエルが幻視した天上の神殿の記述がある。ここではすでに新イェルサレムは宇宙の神殿として描かれており、ヤハウェは宇宙全体の神として神殿そのものとなっている。この天上の新イェルサレムの描写が最初に認めれるのは『イザヤ書』においてである。こうした旧約聖書の天上の新イェルサレムの描写がそのまま『ヨハネの黙示録』に引用され統合されている。(注11)［図３］

『ダニエル書』はキリスト教の黙示録的な予言思想を支える重要な柱であり、そのなかで語られている四つの幻視は『ヨハネの黙示録』の幻視を決定付けている。その幻視とは四頭の獣や四本の角をもつ雄山羊の記述、あるいは救世主の到来、そして天使の救済の予言といったものである。『ダニエル書』は歴史の終末についての神との交信の記録といってもよいだろう。(注12)

このほかにも『ヨエル書』や『第二バルク書』そ

図3　ヨハネが幻視している天上の新イェルサレム
ルーカス・クラナハ、1534年

して死海聖書からの引用も確認されている。こうした予言書は紀元前11世紀から紀元前５世紀ころに書かれたものである。それを基にして紀元前２世紀ころから様々な黙示録が書かれ始めた。そのような旧約聖書の予言書が集大成されたものとして新約聖書の『ヨハネの黙示録』がある。

『ヨハネの黙示録』という予言書の魅惑的で幻想的な世界観は神学における聖書の解釈自体をおおきく転換させてしまった。すなわち『ヨハネの黙示録』が後に書かれたものであるにも関わらず、旧約聖書の予言書が『ヨハネの黙示録』を起点として遡るようにして解釈されてしまっているのだ。この主従が転倒した解釈が本来の予言書の意味を歪めてしまっている。それほど『ヨハネの黙示録』はキリスト教において決定的な意味をもっているのである。(注13)

第２章
黙示録文学の成立と垂直のユートピア

『ヨハネの黙示録』は５世紀に聖アウグスティヌスが著した『神の国』により完全に否定された。その直後から黙示録思想はキリスト教の歴史の表舞から姿を消した。しかし黙示録思想自体は中世の時代に完全に消衰したわけではなかった。なぜならば『ヨハネの黙示録』は新約聖書の正典であったからである。それは写本を通じて中世ヨーロッパ世界へ広まっていった。その理由は『ヨハネの黙示録』における千年王国の到来を人々が待望していたからであろう。もともと『ヨハネの黙示録』はユダヤ民族の救済思想が人類全体へ普遍化されていく過程で生み出されたものである。それがアレゴリー化され、新しい世界の到来というキリスト教の救済思想へ読み換えられたものだ。そして一つの文学形式にまで昇華された。

第１節　黙示録文学としての『ヨハネの黙示録』

古代ユダヤ教において登場した幾多の予言者は神に代わって神の啓示をおこなっていた人々である。しかしそれはユダヤ民族の救済に限定された予言であった。そして神とは唯一神ヤハウェイであった。しかし古代ユダヤ教の後期において民族救済の解釈が人類全体へ普遍化されていく。この過程で民族救済の具体的な物語が非現実的な物語へ変容していく。やがてキリスト教の黙示録文学としてアレゴリー化されていった。古代ユダヤ教の救済思想とキリスト教の救済思想の関係を黙示文学の視点からあらためて検証をおこなう。

１．黙示録文学の成立

古代ユダヤ教の救済思想は東地中海諸国を舞台とした唯一神と人間との契約の物語であった。それが旧約聖書である。やがて古代ユダヤ教後期の紀元前２世紀ころになると救済思想が次第に普遍化され抽象化されてくる。この時期に現実のイェルサレムの都市の再建は、天上に想定された「神の国」である新イェルサレムへ読み換えられていく。このときに新イェルサレムからは神殿が削除されていく。新たなイェルサレムの姿について、天国を訪れた予言者から報告されるようになった。こうした一連の新イェルサエムの幻視の描写とし

ての予言書が黙示録文学を準備した。

黙示録文書は紀元前３世紀から紀元後２世紀ころの間のユダヤ教の予言書のなかに認められる。それが一つの物語として黙示録思想を形成するようになる。それはヘブライ語により書かれた『ダニエル書』『第一エノク書』『第二バルク書』『第四エズラ書』『アブラハムの黙示録』といった旧約聖書の予言書においてである。(注14)そして新約聖書の『ヨハネの黙示録』はこうした予言書の黙示録文書の集大成として紀元後１世紀ころにヨハネにより書かれた。

黙示録思想では恐怖と不安の世界の到来という悲観主義に貫かれているのが特徴的である。やがて黙示録思想は世界の終末思想と結び付き、アレゴリー化され、黙示録文学という新しい文学形式を生み出した。

２．黙示録文学の形式

旧約聖書では神との契約としての律法が世界の秩序を規定していた。しかしキリスト教が誕生する過程で、モーセの契約が神の啓示すなわち黙示へ変わっていく。こうして生まれた黙示録文学には二つの特徴がある。一つは神の黙示、すなわち神のみが知る真理を被うヴェールを取り払って開示する（Offenbarung）ことである。もう一つはその文学形式にある。すなわち世界の終末には必ず革命的な逆転劇が起こることである。この逆転劇は『ダニエル書』(165)における終末の解釈が最初であるといわれている。聖書のなかでも『ダニエル書』が最初にして偉大な黙示文学として位置付けられているのはこのためである。この逆転劇では、終末が到来すると世界はまず滅び悪に支配される。しかしこの後に必ず至福の時代が訪れて万人は救済されるという逆転の物語の形式である。その至福の世界こそ千年王国であり新イェルサエムなのだ。(注15)旧約聖書を貫く悲観論は新約聖書では楽観論へ大きく変容していった。すなわち新約聖書の『ヨハネの黙示録』ではキリストの勝利という逆転劇により、世界の終末は栄光につつまれた千年王国到来という楽観論へ転じているのである。これが黙示録文学を文学たらしめている最大の特徴である。

古代ユダヤ民族の救済史はあくまで民族の歴史である。このためイスラエルの年代記の枠組のなかで展開されていた。しかしキリスト教が生まれた時代に形成された黙示録文学では、ユダヤ民族という存在はすでに捨象されてしまっている。キリスト教の救済は現実の歴史を超越したものとなってしまっている。黙示録文学は超越的な神の必然的な計画により導かれた終末における救済という文学である。この非歴史性や非具体性が抽象的な文学への移行を促したのだ。(注16)

第２節　水平のユートピアと垂直のユートピア

予言者はいつの時代にも現世の危機を指摘し、来たるべき未来の理想の世界を予言した。それは時間的には未来のことである。しかし空間に着目した場合、それは現在の地上の都市や国家についてのことである。すなわちエジプトを発ってカナンの地を目指したり、バビロニアからイェルサレムに帰還して国家を再建する。このように地上での空間における水平移動の救済の物語である。これに対して『ダニエル書』では全く異なった空間において救済の物語が展開している。すなわち天上から降臨する救世主の黙示により、天上から新イェルサレムという至福の世界としての千年王国が降りてくるのだ。これまでの水平のユートピアの黙示に対し、これは垂直のユートピアの黙示ということができるだろう。

１．水平のユートピア

古代ユダヤ教の救済は『申命記』に記されている。すなわちモーセという予言者が神の啓示を受けてエジプトを脱出し荒野を遍歴することから救済の物語が始まる。ここには宇宙論的な空間の広がりが一切認められない。すなわち救済という歴史は地上を這うように移動する水平空間のなかで展開されている。政治的な民族救済の救世主による運動は、どこまでも地上的であり彼岸的な終末論であり水平的である。民族の自立と自由への願望に基づくユートピア思想に超越的な概念が欠如しているからである。モーセに象徴される救済思想は典型的かつ最初の水平方向への脱出モデルであるといえるだろう。(注17)古代ユダヤ教あるいは旧約聖書の救済は歴史における民族の終末思想である。この具体的な民族救済の思想が、古代ユダヤ教後期の予言書では少しずつ観念化されてくる。たとえば『第四エズラ書』では民族の終末思想が後退し、普遍的な全人類を対象とした終末思想へ移行し始めている。現実のイスラエルの再建

から千年王国思想への移行がこのころ始まった。しかしこの千年王国思想はまだ時間的な前方における救済思想であり、空間に関する展開が一切ない。現状の都市や国家が造り替えられることが前提とされている。すなわちこの時点では水平のユートピアのモデルがまだ支配的であるといえるだろう。空間という概念自体が俎上にのぼるのは『ダニエル書』の黙示録を俟たねばならない。(注18)

2．垂直のユートピア

水平のユートピアが垂直のユートピアへ切り替わるときに千年王国思想が大きな役割を担って登場してくる。ここで前提となる重要なことはキリスト教が禁欲思想と結び付いていたことである。既存の世俗的な秩序を破壊し超越するためには宗教的な精神性が求められる。絶対的禁欲意識への純粋志向こそが「神の国」という禁欲的なユートピアを生み出したのだ。欲望と争いにまみれた地上の世界を否定するものであり、人間の自律的な存在を否定する神の世界である。それは聖アウグスティヌス (354-430)が『神の国』(413-426)のなかで「神の国」に対して「地の国」を措定したことに起因している。彼は「地の国」を、救済されなかった人々の永遠の破滅の世界として解釈したのである。このため必然的に「神の国」は大地から垂直方向へと乖離した天上に措定せざるをえなくなった。(注19)

聖アウグスティヌスは５世紀に『神の国』によりキリスト教を再構築した。このとき彼は新プラトン主義を援用している。新プラトン主義の一者をキリスト教の神に置き換えたのだ。すなわちプラトンの神秘主義思想とキリスト教の終末思想がここに習合されたのである。地上の人間が死ぬとその魂は至高神のもとへ帰り着いて合一する。こうして聖アウグスティヌスはそれまで断絶していた地上における現世と天上の神の世界を結び付けた。このときに垂直方向の宇宙の空間軸が決定的となったのだ。こうして古代ユダヤ教で支配的であった水平の歴史内在的終末思想からキリスト教を特徴付ける垂直の超歴史的終末思想へ飛躍的な展開を遂げたのである。

教会という建築の嚆矢は、イエスの弟子であるペトロを祀る建築である。ローマ帝国のコンスタンティヌス大帝 (在位306-337)が教会の建設を命じた。ペトロとはイエスから「天国の鍵」を託された弟子であり、教会建築とは地上におけるその鍵とみなされていた。教会に行って礼拝をおこなうことは天国へ至る道の入口に着いたことを意味する。

図4　聖イグナチオ教会天井画では平面である天井が上方へと突き抜けているように見える。屹立する荘厳な建物から上空へと無数の人々が舞い上がっていく様子が描かれている。
《聖イグナティウスの勝利》アンドレ・ポッツォ、1691-1694年

ゴシックや対抗宗教改革の時代に建てられた教会建築を特徴付けるのは中央のドーム型の天井である。身廊と翼廊の交差するところに塔を付加することは、構造的に安定感に欠け不合理である。しかし、それには重要な意味があったのだ。そこには天上の神の世界へと人々が導かれていく様子が描かれていることが例外ではない。礼拝に訪れた人々はそこで死後天へと魂が上昇してく疑似体験をした。それは黙示録という垂直のユートピア思想が建築へ反映されたものといえるだろう。(注20)［図４］

第３章
千年王国思想と黙示録

古代ユダヤ教の救済史における地上のイェルサレム再建は、キリスト教では垂直のユートピアへ読み換えられた。全人類が救済されるという普遍化された救済思想では、世界の終末に天上から新イェルサレムが降臨する。最後の審判をへて復活する死者たちは浄化された後にこの至福の国である千年王国で終末後の人生を送ることになる。こうして古代ユダヤ教における具体的なイェルサレムの再建は、キリスト教において完全に観念化され、千年王国思想へアレゴリー化された。キリスト教における終末思想において新たに構築された虚構としての千年王国思想とはいったいどのようなものなのだろうか。

第１節　世界の終末と千年王国思想

古代ユダヤ教の終末思想における国家再興あるいはソロモン神殿再建とは、地上における現状の回復である。現在破壊されている都市を造り直すことを意味する。しかしキリスト教における千年王国思想では、終末後に新イェルサレムは天から降りてくるのである。それが地上に現在ある都市にとって代わるのだ。『マルコの福音書』のなかでイエスが「わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる」(14:58)といっている。このようにキリスト教では世界は神の計画に従い歴史の終末を迎えるのである。(注21)

１. 千年王国思想の成立

千年王国思想という楽園思想の起源はキリスト教以前に求められる。古代ユダヤ教の予言書である『イザヤ書』や『エゼキエル書』そして『ダニエル書』では救世主の到来の待望論のなかで千年王国が語られている。そして『第二エノク書』や『第四エズラ書』では地上の楽園として千年王国という観念的世界が詳述されている。(注22)

『ヨハネの黙示録』が書かれたあとで、もっとも具体的に千年王国という安息の世界を説明してくれたのはキリスト教神学者のエイレナイオス(140-202頃)とテルトゥリアヌス(160-220)である。彼らが２世紀のころに天上の新イェルサレムあるいは新イェルサレムという千年王国類型論を体系付けた。それに続いて聖ヒッポリュトス(170-236)の『キリストと反キリストについて』と『ダニエル書註解』や護教論者でありコンスタンティヌス帝の助言者であったラクタンティウス(260-325)の『神的教理』が千年王国思想を補完した。こうして千年王国という楽園の虚構は少しずつ整えられていく。(注23)

キリスト教の終末思想の千年王国とは、神とともに暮らす信仰共同体である。この理想とする信仰共同体の原形は「イェルサレム原始教団」である。それはイエスが処刑された後に離散した弟子たちが再びイェルサレムに戻り結成したものである。この他にもギリシア語を話すユダヤ教徒や回心した異教徒たちにより原始キリスト教会が形成された。(注24)彼らは選ばれた聖徒を自覚していた。すなわち世界の終末にキリストが再臨した後、神とともに生活する新しい民となる選ばれた聖徒である。理想化された原始キリスト教会への憧憬は中世に修道院を生み出した。それは腐敗したカトリック教会に代わるものであった。さらに16世紀の宗教改革を経て敬虔主義者たちなどにより17世紀に至るまで、千年王国への憧憬のもとで原始キリスト教会として幾つもの信仰共同体が出現した。

古代ユダヤ教の終末思想の最終目的は、国家と神殿の再建によるユダヤ民族再興にあった。しかしキリスト教の千年王国思想における新イェルサレムは建造物としての都市や神殿ではない。それは人々の集合体を意味している。それはユダヤ民族救済史における国家再建としてのイェルサレムとは異なる。このためキリスト教の天上の新イェルサレムでは神殿が必要とされないのである。『ヨハネの黙示録』(21:11-14)によると、神殿は神と子羊であると解釈されている。その神殿の土台とは十二使徒となっている。(注25)神との約束に適った子羊とは誰なのか。それは救世主に導かれて至福の世界へ到達することができた選ばれた聖徒たちなのである。

キリスト教では新イェルサレムは人々の集合体を象徴するものとして解釈された。さらにそれは具体的に人が造るものではなく、世界の終末に天上から降りてくるものとなった。こうしてキリスト教はユダヤ民族救済のメシアニズム(救世主主義)から脱却する。そして新プラトン主義というギリシア哲学のロゴスにより民族救済史から脱却

した。こうして普遍的な真理を基盤とするキリスト教の黙示録思想が構築されたのだ。それまでの旧約聖書におけるユダヤ民族の歴史をアレゴリーとして解釈することにより、キリスト教の救済は非歴史化されてしまった。そして同時にユダヤ民族の歴史的都市であるイェルサレムも天上の新イェルサレムとして読み換えられた。アレゴリー化された「神の国」は完全に虚構のなかの観念的な都市となった。(注26)

新約聖書の正典でありながら『ヨハネの黙示録』は異端説であるとして批判を受けていた。しかしキリスト教の正当な教義が確立したあとも、至福千年の到来を待望する人々の熱気が収まることはなかった。千年王国思想はキリスト教の成立とともに2世紀から5世紀にかけて広まりをみせた。正統な神学者ばかりでなくグノーシス派のような異端や殉教者なども共感をあらわにした。(注27)その理由はおそらくユダヤ民族の苦難の歴史の救済を基盤とした旧約聖書と異なっていたからであろう。新約聖書では世界の終末が楽観論的なキリストの勝利による千年王国の到来の世界観へ大きく転換されていたからである。やがて5世紀になると聖アウグスティヌスの『神の国』がキリスト教会に公認された。このなかで彼は黙示録思想を否定している。現世のキリスト教会が実現された千年王国であると解釈した。その結果『ヨハネの黙示録』の終末思想は否定され、それ以降に千年王国は語られることがなくなった。

2. 千年王国へ至る終末のプロセス

キリスト教というものは古代ユダヤ教の救済思想のアレゴリーとして構築された。その過程で黙示録のなかの千年王国思想が重要なものとなってきた。なぜならば全人類救済としてのキリスト教というアレゴリーを成立させるうえで、キリスト教は現実から乖離し抽象化されていく。それと並行し綿密な救済過程が構築され非歴史化されていく。聖書の天地創造という栄光に満ちた最初の日から歴史は始まる。そして全てが没落の途上となる世界の最終段階において、救済の逆転劇が組み込まれた。その結果として千年王国が最後に降臨して救済は成就されることになる。(注28)

終末へ至る過程の骨骼は中世のスコラ哲学により決定されている。スコラ哲学は宇宙の構造も詳しく規定しているからだ。それは地球を中心として同心球状に宇宙の階層が構築され天上の世界へ

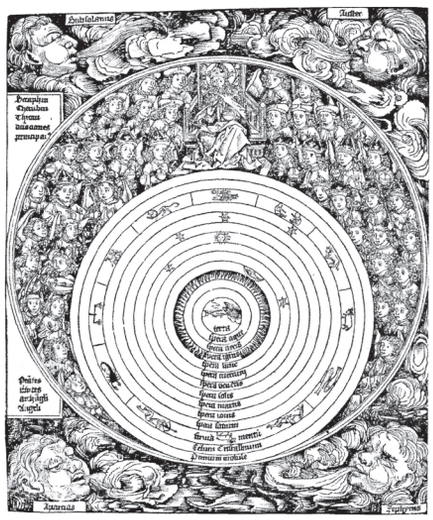


図5　宇宙は同心球の天球層から構成されている。地球の四層は大地、水、空気、火からなり、その外側に七つの惑星の天球層があり、その外側を黄道十二宮が囲んでいた。第十天の外側の至高天には神や聖人が沢山いた。
ハルトマン・シェーデル『世界年代記』1493年

達している。その天空の空間的な構造は地上のキリスト教会の組織構造と一体化されている。そして世界の終末の過程がこの空間構造のなかに組み込まれ展開されている。すなわち死後人々は幾重にも階層化された宇宙の構造の断面を見ながら天国へと上昇していくのである。(注29)[図5]

最後の昇天の部分に限定するならば、旧約聖書では『イザヤ書』や『ダニエル書』において語られている。しかし救世主による世界の終末の体系的な千年王国思想は『ヨハネの黙示録』において成立した。ここで世界の終末が宇宙のドラマへ大きく展開されたのだ。この終末の千年王国降臨へいたる過程は十段階の構成となっている。(注30)

第1段階では天変地異の自然災害がおとずれる。第2段階では天から反キリストであるサタンが出現し世界を混乱に陥れる。第3段階では救世主である神の子イエス・キリストが受肉して地上に再臨する。第4段階では救世主とともに天にいた義人たちが降臨し、地上の諸国民と戦う世界最終戦争が勃発する。第5段階では戦争の結果、民が解放され新しい世が出現し至福千年が到来する。第6段階では人間が堕落し、第7段階ではサタンが勝利する。そして第8段階では全てが火に包まれて終末を迎える。第9段階で最後の審判がおこなわれ万人が復活を果たす。そして最後に天上から地上へと新イェルサレムが降りて歴史の終末を迎え、至福の千年王国が実現されるのである。

３．前千年王国思想と後千年王国思想

千年王国思想の成立の過程を述べた。しかしじつは上述のものを含めて大きく二種類の千年王国思想が知られている。キリストの再臨と千年王国の降臨の順番の考え方の違いにより大きく二種類に分類されている。一つ目は上述のように、先にキリストの再臨がおこなわれる。その後で地上に平和と義の栄光の御国としての新イェルサレムが確立される。これを前千年王国思想という。それに対して二つ目は後千年王国思想である。これは千年期の間に福音がいきわたり、サタンは封閉されユダヤ人は回心する。そして千年を経て千年王国が完成し、その後でキリストが再臨するという考え方である。後千年王国思想はキリストが主体的である。このため人間は受動的で静止的である。それに対して前千年王国思想では千年王国を実現させるのは人間の能動的な活動に委ねられているのが特徴的である。

じつはこのほかに三つ目の無千年王国思想がある。これは後千年王国思想の変形版である。千年王国がキリスト誕生のときからすでに始まっているという説である。すなわちキリストと聖徒による千年の支配を、地上における教会が勝利している歴史の全期間と、同一視するという考え方である。現在のキリスト教会において千年王国は実現されており、千年期の後にキリストは再臨するという思想である。これを唱えたのは聖アウグスティヌスである。

３世紀ころまでの原始キリスト教では前千年王国思想が支配的であった。しかしオリゲネス(185-254頃)の心霊主義的な千年期説の終末思想と、聖アウグスティヌス『神の国』により、前千年王国思想はやがて主流から外れていく。(注31)

中世の時代は圧倒的に後千年王国思想が支持されていた。カトリック教会を批判した宗教改革後のプロテスタント教会は前千年王国思想である。しかしルター自身は『ヨハネの黙示録』が神の教えを説く福音ではないと判断した。このため千年王国思想自体をルターは否定している。一方でプロテスタントの一派であるドイツ敬虔主義のシュペーナーやベンゲルなどは前千年王国思想を支持した。また17世紀のイングランドのピューリタンたちは前千年王国思想であったが、会衆派は後千年王国思想であった。アメリカでは主に前千年王国思想が信じられていた。(注32)

前千年王国思想とは人間の積極的な地上での「神の国」の実現を支えた思想である。そこでは歴史の進歩が前提とされている。人々は歴史のなかで自らの手により千年王国を実現させようとした。キリスト教が再臨するまえに地上を浄化して準備しておかねばならないと考えたからである。この前千年王国思想は近代に至る過程で世俗化されていく。それはやがて近代においてヨーロッパ諸国で認められた田園都市運動などのユートピア都市構想へ結び付いていったと考えられている。こうした視点からみると田園都市という近代都市運動がおもにプロテスタント諸国で実践されていたことが理解される。

４．降臨しなかった千年王国

最初の千年期である紀元千年が間近に迫ったヨーロッパでは世界の終末の到来を恐れる人々が多かった。イギリスでは962年にロンドンで疫病と大火災があり、975年には大飢饉があった。そして986年には家畜の疫病が蔓延し、世紀が明けて1005年には大飢饉がまた訪れた。こうした天変地異が世界の終末の前兆として考えられたのだ。ほかのヨーロッパ諸国においても同様に、10世紀末になると人々は世界の終末を恐れていた。

しかし紀元千年には何も起こらなかった。いくら待っても世界の終末もキリストの再臨もなかったのである。そして人々はこの恐怖から解放された。その結果千年紀直後から熱狂的な教会の建設ラッシュがおこった。特にイタリアとフランスといったラテン・カトリック系キリスト教諸国において顕著であった。(注33)

しかし終末思想への熱気はいっこうに収ることがなかった。1184年に出版された『トレド書簡』では、占星術により1186年に終末が訪れると予言された。ところが次々修正され、1229年、1345年、1395年そして1516年と予言は延長を繰り返した。しかし世界の終末が来ることはなかった。フィオーレのヨアキムは1260年までに終末がくると予言したがこなかった。(注34) コンスタンチノープルの大主教ゲナディオス・スコラリオスは1466年に、オルヴィエートは1499年11月７日に終末の到来を予言している。こうした予言は紀元1500年への恐怖に起因している。(注35)

ローマ教皇は1516年の第五回ラテラノ会議において世界の終末が訪れる日の計算を禁止した。しかし紀元1500年を過ぎても終末の予言は絶えることがなかった。(注36)

ドイツの占星術師によると魚座における合が1524年にあるので終末が訪れると予言した。(注37)イタリアのドミニコ修道会の会士トマソ・カンパネッラ (1568-1639)は終末を1650年と算出している。(注38)テュービンゲンのフランシスコ修道会の会士ヨハン・ヒルテンは世界の終末を1651年と予言した。(注39)

アメリカでは初期ニューイングランドのピューリタンの会衆派を代表とするジョン・コットン(1584-1652)は1655年に千年王国が始まると予言している。(注40)イングランドのピューリタン革命を準備した第五王国派のウィリアム・アスピンウォル (1605-1862)は1673年に終末が訪れると予言していた。(注41)スコットランドのジョン・ネーピア (1550-1617)は1695年あるいは1700年に最後の審判がおこなわれると算出している。(注42)ニューイングランドのコットン・マザー (1663-1728)は世界の終末を1710年と算出した。(注43)ドイツ敬虔主義者のベンゲルは終末を1836年と算出している。(注44)またセブンスデーアドベンティスト教会 (第七日再臨派)のウィリアム・ミラー(1782-1849)はキリスト再臨派であるが、『ダニエル書』を詳細に検証した結果として1844年に千年王国が開始すると断言した。(注45)

ウィリアム・ミラーの影響を受けて1872年にチャールズ・テイズ・ラッセルが設立したエホバの証人では1874年にキリストが再臨していたと発表した。しかし霊体であったので普通の人には見えなかったと主張した。20世紀に入ってからも世界の終末の到来の予言は絶えることがなかった。このエホバの証人の後継者であるジョゼフ・フランクリン・ラサフォードは世界の終末を1914年そして1916年から1941年に修正を重ね、最後に1975年はアダムが造られて六千年目の年であるとして千年王国がはじまると予言した。しかし予言は全て外れてしまった。(注46)神は降りてこないのである。

第II部
ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

黙示録文学は『ヨハネの黙示録』において大成された。それは世界の終末の物語がアレゴリー化されたものである。そしてこの黙示録文学は近代に至るまで継承された。特にドイツでは第一次世界大戦の勃発が黙示録思想を復活させたのである。それほど人々の社会不安が増大していたといえるだろう。その憂国の情が人々に千年王国の到来による世界の刷新を期待させたのだ。近代の黙示録思想のもとで開闢したのがドイツ表現主義と総称されるモダニズム運動である。第II部では、第一次世界大戦以降の表現主義の時代を対象としている。具現化された千年王国思想としてブルーノ・タウトの『都市の冠』を取り上げる。そして黙示録という視座からあらためてドイツ近代芸術運動を代表とする表現主義建築を究察する。

第4章
ドイツ表現主義と黙示録思想

ドイツ表現主義という近代芸術運動は、ユダヤ教とキリスト教の2500年にわたる黙示録思想の歴史のなかに位置付けられることにより初めてその真意が明察されうるものである。このような視座からドイツの近代建築が解明されることは今までなかった。黙示録思想が黙殺されたといっても過言ではない近代史をあらためて解釈し直すということは、結果としてドイツのモダニズムという概念そのものを根本的に問い質すことを不可避とするだろう。ドイツのモダニズム芸術の思想的な側面についてワイマール共和国の成立から再検証をおこないたい。そしてドイツ表現主義建築という芸術を黙示録思想との関係のなかにあらためて解釈し位置付けることを試みる。

第1節　第一次世界大戦と終末思想

19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期のヨーロッパでは、未来の社会や都市を追求する新しい思想や芸術が芽生えてくる。ドイツも例外ではなかった。1890年に宰相ビスマルクが退陣す

るという象徴的な歴史的事象があった。これを契機として旧来の重苦しいヴィルヘルム時代への反発のもとに「堕落したロマン主義」が復活した。ドイツでは情動に任せた自由を弄ぶような精神の発露がみえ始める。一方ですでにキリスト教は人々の精神の拠所(よりどころ)としてその役割を担うことができなくなっていた。しかしこうした状況は第一次世界大戦の勃発で一変する。世界に終末が訪れたのだ。そしてドイツでは黙示録思想としてキリスト教が復活してくる。革命により誕生したワイマール共和国は実現された「神の国」として栄光に包まれた千年王国そのものである。

1．近代へ生き延びた黙示録思想

ドイツを衝き動かしてきた「プロテストする国ドイツ」の精神は、二千年にわたるゲルマン民族の文化を支え続けてきた。それはローマ帝国からの弾圧への抗議から始まる。その後ローマ・カトリック教会への抗議である宗教改革を経て第二次世界大戦での敗北に至るまで続いた。それはワグナーの楽劇《神々の黄昏》に象徴されるような、悲劇的あるいは運命的な民族の没落という壮絶な終末思想に彩られている。黙示録思想はどの国よりもこの「プロテストする国ドイツ」と密接な関係を持ち続けてきたのだ。

宗教改革以降のドイツが破滅と救済を繰り返してきた歴史は黙示録思想のなかに解釈されてきた。しかし啓蒙主義をへて自然科学が勃興する時代になるとキリスト教が世俗化されてくる。それと同時に黙示録思想が希薄となっていった。しかし合理主義や主知主義の周縁には、神秘主義あるいは異教の神話が淘汰されることなく生き長らえていた。宗教化された自然哲学という根本的な矛盾のなかにロマン主義が浮上してくる。こうして啓蒙主義への違和感から18世紀になるとプロテスタントのドイツでは「堕落したロマン主義」への志向が認められるようになる。

ロマン主義は人々の不安や恐怖の受け皿となった。それはキリスト教の黙示録思想における世界の終末を受容したことを意味する。その結果として現実の歴史がキリスト教の歴史として解釈されていった。こうしてキリスト教はこのロマン主義の歴史観に基づいた歴史的世界の再構築のなかに改めて解釈され位置付けられた。(注47)

ドイツでは黙示録思想が近代に復活した。それを準備したのはドイツ敬虔主義の人々であった。彼らが18世紀から19世紀にかけて黙示録思想を近代へ継承する役割を担っていた。彼らは聖書に基づく篤い信仰を貫き、結果として内省化していった。彼らは社会的に無関心となる。ドイツ敬虔主義では現世を改善することにより理想を実現しようとしなかったからだ。彼らは現世を放棄し世界から逃避し、神の世界に理想世界を求めていったのである。こうして理想世界は「神の国」に求められた。ドイツでは敬虔主義により千年王国思想は断絶することなく近代へ継承されていったのである。(注48)

ドイツの世紀転換期の一般社会において人々は精神的な拠所を失っていた。キリスト教への信仰は薄れ「神々の黄昏」と「堕落したロマン主義」が支配する時代である。このときに第一次世界大戦が勃発した。ドイツのみならずヨーロッパ全体が一転する。「堕落したロマン主義」は戦渦のなかで雲散霧消し、それに代ってドイツは終末観により支配されていく。

2．千年王国としてのワイマール共和国

第一次世界大戦という世界の終末では、経済状況の悪化と社会不安が人々に厭世観をもたらした。この暗鬱な空気のなかで1918年11月にドイツ革命が勃発した。その引き金となったのは1917年のロシア革命である。ドイツではキール軍港の武装兵士による反乱が契機となった。やがて労働者を巻き込んだ大暴動へ発展する。そして労兵評議会が結成される。並行してミュンヘン革命が勃発しベルリンへ波及する。こうして500年続いたホーエンツォレルン家による君主制は崩壊し、ドイツは共和国という法治国家への移行が決定的となった。

第一次世界大戦後のドイツでは古いものがすべて滅び去り、軍隊に象徴されたヒエラルキーの社会構造が崩壊した。敗戦は新しい時代が必ず訪れるという黙示録的な終末の時として捉えられた。古い世界は断末魔の痛哭(つうこく)のなかにある。しかしそれは新しい世界の誕生が約束された苦しみとして解釈された。共和国樹立の熱狂のもとで、革命の犠牲者の死は殉教として美化された。社会は悲劇に陶酔する人々で溢れた。なぜならば黙示録思想が世界の終末を希望の光へ転じさせたからである。潜在化していた黙示録思想がドイツで再浮上したのだ。それにより第一次世界大戦は単なるドイツ国家の滅亡の歴史から救済されたといえるだろう。すなわち、世俗的な歴史認識論としての戦争での

敗北の歴史は、キリスト教の黙示録における終末思想のなかに解釈されたのだ。このため世界の終末のあとには必ず至福の時が訪れて、万人は救済されるという楽観論としての逆転劇のなかで、敗戦はその前段階の不可欠なプロセスとして解釈されたのだ。だからこそワイマール共和国は地上に降臨した新イェルサレムとして解釈されたのだ。ワイマール共和国は『ヨハネの黙示録』の救済思想が世俗化された千年王国そのものなのである。

ユートピアは終末論に組み込まれた歴史の構造のなかに出現するものとして解釈できる。すなわち理想とする自由な社会としてのワイマール共和国は第一次世界大戦という世界の終末を経ることなく樹立されることはありえなかったのだ。近代において黙示録思想が浮上してくるのは、キリスト教における終末思想が普遍性をもっているからではない。近代社会の構造が終末思想を内在させているからといえるだろう。

しかし黙示録思想を背景としたワイマール共和国の樹立への熱狂的な歓喜の嵐も、1924年ころになるとどこかへ消え去ってしまった。経済的にも政治的にも国家が安定してきたからである。その一方でナチズムがすでに忍び寄ってきていた。つぎの世界の終末は世界恐慌（1929）のなかですでに始まっていたのである。

第２節　ドイツ表現主義と黙示録思想

第一次世界大戦という世界の終末において、はじめてドイツ表現主義という芸術運動が萌芽する。表現主義は「堕落したロマン主義」の延長ではない。全く別の次元の芸術運動として解釈されねばならない。両者は世界の終末である第一次世界大戦という大きな精神的危機において一線を画している。第一次世界大戦は近代において黙示録思想を完全に復活させた。このため大戦を契機として生まれたドイツ表現主義という近代の芸術運動は黙示録思想を措定することにより初めてその真の意味が理解されうるのである。プロテスタントであるドイツ語圏の芸術や文化において表現主義という芸術運動が顕著なのはこうした理由により解釈される。(注49)

１．第一次世界大戦とドイツ表現主義

ドイツにおけるモダニズムという概念を考える場合に重要なことがある。それは第一次世界大戦との関係である。世紀転換期には新しい時代への模索という弛緩した精神的状況があった。しかしそれは第一次世界大戦の勃発により一掃されて緊張へと一気に転じてしまった。なぜならばドイツ国内の問題が全てであった人々に世界の終末が訪れたからだ。

第一次世界大戦の当時のドイツとは没落する国であり死が日常を支配する異常な世界であった。世紀末に爛熟した文化は過去のものとなった。ヨーロッパ社会全体が停滞し破局を迎え始めていた。全ては崩壊に向かって盲進していく。この淪落（りんらく）した世界の状況のもとで「堕落したロマン主義」は役に立たなかった。人々はメシア的な救済の可能性へ一縷の望みを託す以外になすすべがなかったのである。

この歴史的かつ世界的な大戦争を挟んでドイツのモダニズムは全く異なった様相を見せたのである。それまで黙示録思想は神学の周縁へ追いやられていた。しかし戦争を契機として黙示録思想は神学の中心部へ引き戻された。黙示録文学は再び生命を与えられ人々の渇いた精神世界を潤していったのである。逼塞を余儀無くされていた『ヨハネの黙示録』の終末思想が人々の日常の世界へ再び甦ってきた。当時キリスト教は単なる道徳的なものへ世俗化されてしまっていた。しかしキリスト教は黙示録思想をとおして人々の切迫した精神状況に応えるものとなった。第一次世界大戦を契機としてキリスト教は現実的な意味を獲得した。たとえばヴォルフハルト・パネンベルクはあからさまに黙示録思想を受容し、人類の最後は終末における神の啓示があると明言した。(注50)

黙示録思想として近代に復活したキリスト教はドイツの近代芸術に対しても多大な影響を及ぼしたのである。すなわちドイツ表現主義は黙示録思想を背景として生み出されたものなのだ。それは世界の終焉において新しい世界の到来を予言したのだ。このドイツ表現主義は黙示録思想のなかに位置付けられることにより、その本質は初めて理解されうるものとなったといえるだろう。

２．ドイツ表現主義と黙示録思想

ドイツ表現主義はハイデガーの『存在と時間』の雰囲気のなかではじめて理解されうるものである。なぜならばハイデガーの『存在と時間』は黙示録思想を背景とした哲学であるからだ。彼は世

界の終末に立ち会っているという異常な精神状態のもとで書いていた。すなわち彼の歴史哲学とは当時のフランス革命という世界の終末を哲学的に解釈したものだからだ。この精神的な状況は明らかに第一次世界大戦が勃発したドイツ表現主義の時代精神に重合する。ドイツ表現主義は第一次世界大戦勃発における終末論的な世界の崩壊の予感に導かれたものである。その現実否定の表現が北方的あるいはゲルマン的な性格のなかに結晶した。両者に通底するのは黙示録思想というプロテスタント特有のドイツの終末思想である。(注51)

興味深いことはユダヤ系知識人であるヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)が表現主義について言及していることである。彼は『ドイツ悲劇の根源』においてドイツ悲劇というバロック時代の芸術と近代のドイツ表現主義との構造的な関係を指摘している。彼が最初に指摘したことは、ドイツ悲劇もドイツ表現主義の芸術も、ともにその芸術が未成熟であることだ。たしかにドイツのバロック悲劇が古典的悲劇の拙劣な復興と評価されているのは確かである。そして近代のドイツ表現主義の芸術作品にも粗野なものが多い。古典的な完成美からは程遠いものといえるだろう。しかし両者に共通するもう一つの特徴は一心不乱な芸術意欲である。そしてそれを凋落の時代の芸術に共通して認められる典型的な現象としてベンヤミンは捉えたのだ。両者はまさに黙示録思想がアレゴリー化されたものとして解釈されることにより同質の構造を持つ芸術に位置付けられた。ベンヤミンは終末思想の視座から、過去のドイツ悲劇と現代の表現主義芸術を捉え直している。そこに時間を超越した「星座の布置」をとおしてドイツ表現主義の歴史的真理の本質を指摘したのだ。(注52)

ベンヤミンはアレゴリーという「星座の布置」をとおして表現主義を解釈した。そしてそこに歴史的真実として黙示録思想を読み取った。なぜならばアレゴリーは歴史を受難史として解釈するなかで生み出された文学理論であるからだ。そこには必ず救済への憧憬が認められる。ドイツ表現主義とは具現化された黙示録思想なのである。すなわち世界の滅亡の時代に姿を現したモダニズム芸術である。絶望的な歴史的局面に出現するメシアニズムとしての救済の芸術とは、時間を超越した歴史的真実となるのである。ベンヤミンはバロック時代のドイツ悲劇と近代のドイツ表現主義を、同じ「星座の布置」という構造を内包した表現芸術として位置付けたのだ。

ドイツ表現主義は栄光に包まれた千年王国という永劫回帰の世界において、生が流転する根源的な世界観を表現したモダニズム芸術である。今という時が充満し垂直に展開した魂のメシア的な表現なのだ。ドイツ表現主義は革命の時に出現する黙示録における終末的な逆転劇として、新しい世の到来を予言する芸術である。

もう一人ドイツ表現主義について言及したユダヤ系のドイツ知識人の思想家がいた。それはテオドール・ヴィーゼングルント・アドルノ(1903-1969)である。彼は表現主義の本質は「無調整」が芸術本体に内在されている構造自体にあると主張している。すなわちドイツ表現主義の芸術としての本質とは作者の主観的表現にあるのではないということだ。既往の芸術形式を破壊する「無調整」という構造を内的に包含している。この特異な構造こそドイツ表現主義がモダニズムであることの本質であり、そこに近代芸術における「誠実」があると彼は考えた。ユートピアとしてのドイツ表現主義の意義は近代のブルジョア社会にありながら、内部から近代のブルジョア的な主観性を解体させてしまうことにある。アドルノが評価しているのは表現主義がこの激烈なる苦悶に対して「誠実」に内部から疑義を質す構造を持つ芸術であるということだ。表現主義芸術にはメシアニズム的な革命思想と同じような根源的な世界の刷新が期待されている。すなわちアドルノにとってユートピアとはブルジョア社会という理性の神話の上に構築されるものではないのだ。彼にとってのユートピアとはどこまでもメシア的な垂直な時間のなかに現状を内部から否定し破壊することで生み出されるものである。それは偽装も抑制もないような純粋な倫理観に基づいた黙示録的なユートピア世界なのである。(注53)

第５章
ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

図6　ブルーノ・タウト
撮影　ウラジミール・ゴロフシチコフ、1933年12月

ブルーノ・タウト（1880-1938）はドイツ表現主義の建築家といわれる。その理由はタウトが設計したガラスのパヴィリオンのデザインによるものだ。このパヴィリオンは1914年のドイツ工作連盟ケルン博のガラス工業会のための展示館として建てられた。しかしそれ以上に彼の著作がタウトを表現主義の建築家であることを決定付けた。彼の一連のユートピア的な著作は第一次世界大戦後の1919年から1920年にかけて発表された。すなわち『都市の冠』『アルプス建築』『都市の解体』『宇宙建築師』である。タウトが最初に発表した『都市の冠』は今まで田園都市の歴史のなかで説明されてきた。しかし世界の終末に描かれた著作の内容を検証すると、『都市の冠』は明らかに黙示録思想に基づいた新イェルサレムとしての都市であることが判ってきた。［図６］

第１節　シェーアバルトの黙示録

タウトの『都市の冠』はイエナのオイゲン・ディーデリヒス社から出版された。タウトがこの本を企画したのは1916年のことである。それは第一次世界大戦勃発から２年を経たころである。1917年８月にはほとんどの原稿を書き上げて出版社へ渡している。しかし出版は大戦終結まで俟つことを余儀なくされた。こうして1919年２月に出版された。［図７］［図８］『都市の冠』はタウトのほかに三人が執筆している。すなわち詩人のパウル・シェーアバルトの二篇の詩と政治ジャーナリストのエーリヒ・バロンそして気鋭の評論家アドルフ・ベーネの論文が掲載されている。また『都市の冠』には数多くの図版も掲載されている。都合72葉である。その最初の図版が巻頭の《聖女バルバラ》である。

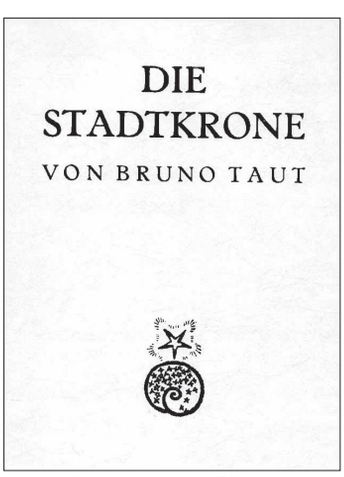


図7　ブルーノ・タウト『都市の冠』の表紙、1919年

図8　ブルーノ・タウト『都市の冠』出版のための宣伝用パンフレット
ディーデリヒス出版社、1919年

１．ヤン・ファン・エイクの《聖女バルバラ》（1437）

ヤン・ファン・エイク（1390頃-1441）は初期フランドル絵画を代表とする画家の一人である。弟ヤンは兄ヒューベルトとともに多くの祭壇画を手掛けている。その絵画作品は深い宗教性と象徴性に裏付けられており、中世の香りを15世紀へ余すところなく伝えている。タウトの『都市の冠』の本文に入るまえの扉のページ中央にファン・エイクの《聖女バルバラ》（1437）が大きく掲載されている。しかし『都市の冠』の本文を通読してみてもこの《聖女バルバラ》について論じられているところは見出せない。そして既往の『都市の冠』に関する研究書や論文もこの《聖女バルバラ》について論じるものはない。唯一ドイツの研究家マンフレッド・シュパイデルがわずかに言及しているだけである。しかしその本質については何も語っていない。（注54）［図９］

そもそも聖女バルバラとはいったい誰なのか。そこから話を始めなくてはならないだろう。聖女バルバラは３世紀に実在した女性のキリスト教の殉教者である。その悲劇的な運命のために十四救難聖人のなかの一人にも数えられている。中世後期に崇敬を集めた聖人である。

バルバラの父はシリアのニコメディアの裕福な正教会の信徒であった。求婚者たちから娘を遠ざけるために父は娘を塔に幽閉した。しかしバルバラはその間に密かにキリスト教へ改宗し洗礼を受てしまう。それは幽閉された塔の窓を改修するときに初めて発覚する。なぜならばバルバラが塔の窓を二つではなく三つへ増やすことを要求したからである。三つの窓はキリスト教の三位一体を意味していたのだ。父は激昂し娘を拷問にかけた。しかし翌朝には神の奇跡で娘の傷は癒されていたという。その後娘は処刑された。その直後地震が起きて父は稲妻に打たれて死んでしまう。

こうした歴史的経緯により聖女バルバラは現在建築家や石工の守護聖人として崇められている。彼女が左手に握っている椰子の枝は、死に対する

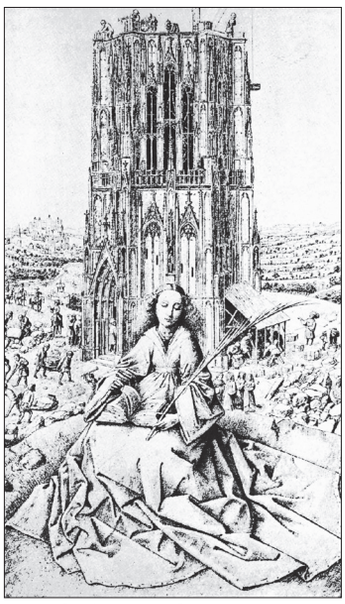


図9　《聖女バルバラ》ヤン・ファン・エイク、1437年
アントウェルペン王立美術館蔵

図10　マントの聖母
『偽ボナヴェントゥーラの聖詩集』挿絵

勝利を象徴したものである。それはキリスト教に回心したことにより永遠の生命を獲得したことを意味している。アメリカのカリフォルニア州には彼女の名前に因んだサンタバーバラという都市がある。これはフランシスコ修道会の宣教師が命名したものである。

このヤン・ファン・エイクの《聖女バルバラ》という絵画作品の構図はシンメトリーを成している。上半分にゴシックの塔が、下半分には聖女バルバラが描かれている。塔の正面に縦長の三つの窓が穿たれている。塔の周辺には多くの石工が描き込まれ、塔が建設中であることが分かる。

ではなぜタウトは『都市の冠』の扉にこのファン・エイクの《聖女バルバラ》を掲載したのだろうか。単に聖女バルバラが建築家や石工の守護聖人であるという理由だけではなさそうである。まずこの塔がタウトの考える「都市の冠」のイメージに合致したと考えるのが妥当だろう。すなわちこの石工たちが塔を建設している描写は『都市の冠』の理念を象徴している。それはタウトが求める理想社会を暗喩していると考えられる。大地で建設に汗を流す石工たちの情熱が、垂直に聳える塔として具現化されていく。それはあたかも一つの精神性へ統合されていくようなイメージとして読むことが可能かもしれない。そうであるならば建設されているのがキリスト教の教会ではなく単なる塔であることも「都市の冠」としては重要であるかもしれない。しかし神を目指すような垂直性が強調されたゴシック建築様式の造形は、この精神を統合するイメージをさらに強調するうえで大きな効果を発揮している。

背景には垂直に建つ塔とそれを建造する石工たちのいる大地が描かれている。その構図は聖女バルバラの姿全体に重なってくる。大地から生まれ出てきたように聖女バルバラは背筋を伸ばすように座っている。そして聖女バルバラの薄衣の裾は水平に広がり大地へ融化しているかのように見えるからである。それは地母神のイメージを喚起させずにはおかない。

しかし聖書を読む聖女バルバラの姿は同時に聖母マリアも彷彿させているのだ。『ヨハネの黙示録』のなかに「頭に太陽を戴いて足元に月を置き十二の星の冠をかぶる」(12:2) ひとりの婦人が登場する。この婦人は聖母マリアと同一視されている。この聖母マリアは大きく広いマントに全ての人々を包み込む姿として描かれることがある。父なる神に対して聖母マリアは全ての信徒の母である。彼女の慈愛は余す処なく信徒に注がれる。この姿が《聖女バルバラ》に重なってくる。(注55)［図10］

聖女バルバラが背筋を伸ばして聖書を読む姿は、背後の大地から天を目指すように垂直に建つ塔という父性に照応している。この絵では母性と父性の二元的要素が止揚されている。そして人々が精神的共同体としての「都市の冠」を造り上げている姿が描かれていると解釈できるのではないだろうか。タウトは建築という唯物的な「都市の冠」としての塔に《聖女バルバラ》に象徴される精神

的な世界を投影させているのである。

この解釈はタウト自身の言葉と矛盾しないだろう。なぜならばタウトが1917年８月13日付で妻に宛てた手紙のなかで次のようなことを語っているからである。この手紙でタウトはまずバロンやカンプフマイヤーが巻頭の《聖女バルバラ》の絵に感動したことを記している。バロンはこの絵を越えて語る言葉がないと言った。さらにタウトにとってこの《聖女バルバラ》は女性と宗教と建築がその核心において融合した原初的な世界を象徴しているとこの手紙のなかに記している。(注56)

２．シェーアバルトの「建築の黙示録」

この《聖女バルバラ》が掲載されたページの次から『都市の冠』の本文が始まる。その巻頭にはパウル・シェーアバルト（1863-1915）による詩が６ページにわたり掲載されている。しかしこれはもともと『都市の冠』のために執筆されたものではない。すでに1902年に出版されたシェーアバルトの詩集『絶えざる勇気（"immer mutig"）』からタウトにより恣意的に引用されたものである。すなわち巻頭の図版とその次に始まる詩にはタウトにより重要な意図が込められていると考えるべきだろう。

シェーアバルトの詩「新しい生」には副題として「建築の黙示録」が付されている。すなわちシェーアバルトの詩の表題を借りて、タウトは自らの『都市の冠』が黙示録であることを主張していると考えられる。たしかに既往の研究では例外なく『都市の冠』は田園都市の視点から論じられてきた。しかし明らかに『都市の冠』は単なる都市計画論ではなく、千年王国の降臨の預言書なのだ。この黙示録の視点から『都市の冠』が究明されることにより全く新しいタウトの建築や都市の解釈が導かれる可能性が生まれた。

シェーアバルトの長大な詩は『ヨハネの黙示録』を基にしている、こうした意味でこの詩は黙示録文学そのものである。詩は『ヨハネの黙示録』の第21章に依拠している。それは黙示録のなかでもっとも劇的な場面を詠った部分である。すなわち天上の新イェルサレムを幻視したヨハネの記述である。シェーアバルトの詩では何百もの宮殿が地上に降りてきて、地球は太陽が暗く見えるほど明るく光輝くと書かれている。

シェーアバルトの詩と『ヨハネの黙示録』を照応させてみよう。天使たちが地球を何百の宮殿で飾るようすをシェーアバルトは「地球はまるで珍しい蝶の羽、凍りついた極楽鳥、輝くダイヤモンドを散らしたように色とりどりとなる。」そして「聳え立つ大聖堂の色鮮やかなガラス窓を通して、そして数多くあるすべての城館から、無数の色とりどりの薄明かりが紫色の雪夜に流れ出る。」また「蘇った者たちは金色の階段を登って、城館や大聖堂に向かう。」そして「純粋な巨大ダイヤモンドでできた大きな城郭は、薄明かりの中へ晴れやかにその色彩を振りまく。」と書いている。(注57)それに該当する『ヨハネの黙示録』では「城壁は碧玉で築かれ、また都はみがかれてガラスのように輝く、純金で築かれていた。都の城壁の土台はあらゆる種類の宝石で飾られていた。」(21:18-19)「そして都の大通りは透き通ったガラスのように輝く純金でできていた。」(21:21)と書かれている。

またシェーアバルトの詩では「紫色の太陽はさらに色を暗くする。遠くの金色の星々もまたその輝きの多くを失っていく。」とある。(注58)『ヨハネの黙示録』では「その都は、太陽も月も、それを照らすのに必要としない。神の栄光が都を照らし、また小羊がその灯火だからである。」(21:23-24)と書かれている。

しかしシェーアバルトの詩では、地球上での至福の時は短い。大天使は全ての宮殿を抱えて天へ帰ってしまうのである。世界の終末に地上で実現されるはずの千年王国は再び天上へ引き上げてしまったところで詩は終わる。すなわち人々は神の救済から見放されてしまったのだ。

シェーアバルトの詩からは1902年当時に黙示録思想がドイツに浸潤していたことが理解できるだろう。タウトはこの詩が第一次世界大戦中の人々の厭世的な終末観を表現していると判断し、引用したと考えられる。すなわち誰も戦争後の未来に期待などしていないのだ。シェーアバルトは神に見放されたドイツの世紀転換期の状況を『ヨハネの黙示録』の援用により表現したのである。それは第一次世界大戦におけるタウトの心情に応えるものとなった。神に見放されてしまった後、タウトは自らの手で千年王国である「都市の冠」を田園都市として構想するのである。

３．シェーアバルトの「死の宮殿」

『都市の冠』の巻末にはシェーアバルトのもう一つの詩が掲載されている。この詩も1902年に出版されたシェーアバルトの詩集『絶えざる勇気』

から引用されたものである。この1ページのなかに詠われた短い詩の表題は「死の宮殿」である。その副題として「ある建築家の夢」が添えられている。この詩もタウトにより恣意的に選ばれたものである。すなわちこの詩は黙示録としての『都市の冠』の結論を意味すると考えていいだろう。詩の内容は次のようなものである。建築家が生涯を通して求め続けた宮殿を訪れる。岩の階段を登った山の頂上に宮殿はある。建築家が宮殿に入ると茫漠とした雰囲気に恐ろしさを感じている。すると神の声がする。「おまえの夢見る芸術はいつも死んでいる。数多くの宮殿たちも生命を持っていない。」そして建築家は咄嗟に叫ぶようにして答える。「私は安息を－平和を望んだ！……つまり永遠の世界への脱退!!!」こうして建築家は自らが望んでいた本来の目的が建築ではなく安息であることに気付いたのだ。そのとき死の宮殿が震えた。

建築家が山を登って宮殿を目指すという物語は、ジョン・バニヤン（1628-1688）の『天路暦程』（1678）のアレゴリーである。（注59）すなわち宮殿は水平のユートピアとしての天国の新イェルサレムに該当すると考えられる。しかしこの宮殿は建築家が神に代わって建てたものである。それは真の「神の国」ではない。模造品あるいは真理の影にすぎない。神の被造物である樹木や動物は生々としている。死んでいるのは人間が造った宮殿だけなのである。それは精神性が欠如した唯物的な建築でしかないことを意味する。タウトは精神性により結合された共同体を理想としてこの『都市の冠』を書いている。それは精神性の極地である美により統合された共同体である。しかしこの精神共同体を今までの建築家は唯物的な建築として解釈してきたのだ。建築家が神に代わり造ってきた偽りの「神の国」は精神性が欠如した「死の宮殿」にすぎない。どれほど宝石で飾られた宮殿であろうとも、そこで静寂や安息といった精神性は得られない。そうであるならばそれは建築家が本来求めてきたものではない。それを建築家が悟った瞬間に、宮殿は震えたのである。

究極的な安息の世界とは、永劫回帰の世界を意味すると考えられる。それは目的を目指して一直線に前進する時間としての歴史の終末におとずれるような宮殿ではない。その後の至福の世界にこそ求められる最終的な救済の世界である。そこでは欲望や苦悩が消滅し、精神が解放され本当の自由や安息が得られる至福千年の世界なのである。

タウトは巻頭に《聖女バルバラ》の絵を掲載している。タウトは巻頭の絵と巻末のシェーアバルトの「死の宮殿」を照応させたと考えるのが妥当であろう。すなわち建築家は求めていた安息が永遠の世界にあることを悟った。現世の地上の宮殿は死んだものに等しい。そして聖女バルバラも現世の仮の生をすてて永遠の生命を得ている。バルバラが処刑されたとき、つまり現世で生を失った直後に地震が起きて父は死ぬ。同じように建築家が安息の本来の意味を悟ったとき宮殿は震えるのである。人間の造った地上の宮殿は虚構の「神の国」に過ぎないのだ。《聖女バルバラ》と「死の宮殿」は同工異曲なのである。両者は永劫回帰の世界にこそ精神の自由が獲得できるということを語っている。それは黙示録思想そのものである。

ところでこのシェーアバルトの詩「死の宮殿」に関して興味深い史実について言及しておきたい。それはスペインのサン・ロレンツォ・デ・エル・エスコリアル修道院についてである。じつはこのエル・エスコリアル修道院は「死の宮殿」と呼ばれていたことが知られている。これは16世紀のスペイン国王フェリペII世が建設させた大規模な複合建築である。それは王宮であり修道院でありそして父カルロスI世のための霊廟であった。

エル・エスコリアル修道院の平面図は不完全ながら外郭が正方形をなしている。そして内部へ九つの正方形に細分化された平面構成であることが分かる。じつは当時フェリペII世の助成のもとで『エゼキエル書』の研究がおこなわれていた。イエズス修道会士のヴィラルバンドが著した『エゼキエル書』の注解書では、天上の新イェルサレムが研究されていた。彼は十二部族の野営のダイアグラムから精緻な分析を始めた。そしてそれを基にして具体的な新イェルサレムの都市が構想され図面化されていた。（注60）［図11］［図12］

エル・エスコリアル修道院はこの究霰（きゅうかく）の過程で生み出された建築の一つであると考えられている。すなわちエル・エスコリアル修道院は地上に造られた新イェルサレムなのだ。この修道院の建築は後期バロック様式の一つであるエレーラ様式で設計されている。このエレーラ様式の建築の特徴は古典主義の冷たい無表情なデザインにある。200メートルに及ぶ修道院の長大なファッサードは扁平な壁面が圧倒的な力で迫ってくる。このためブルボン家の人々はこの修道院のことを「死の宮殿」と呼んでいた。［図13］［図14］

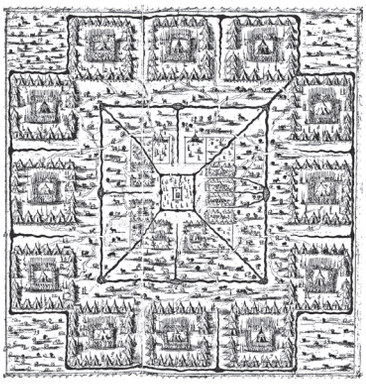


図11　ユダヤ民族の砂漠の野営天幕配置図
1647年
ヤコブ・ユダ・レオン

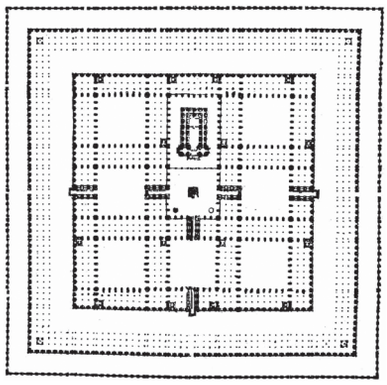


図12　エゼキエルが幻視した新イェルサレムに基づいたソロモン神殿の平面図
1604年
フアン・ボティスタ・ヴィラルパンド

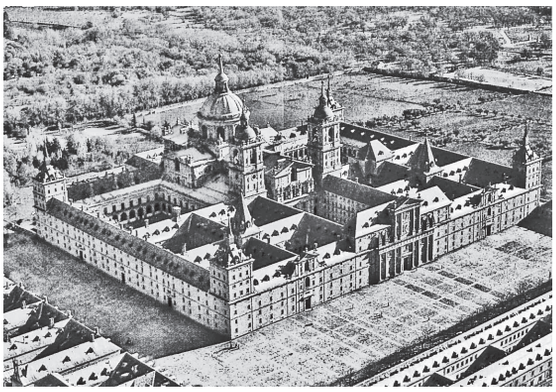


図13　サン・ロレンツォ・デ・エル・エスコリアル修道院の外観
1563-1584年
スペイン・ルネサンス建築特有のエレーラ様式で建てられた修道院の扁平な外壁は207メートルに及ぶ。その陰欝な外観から「死の宮殿」と呼ばれ、ブルボン家から嫌われていた。

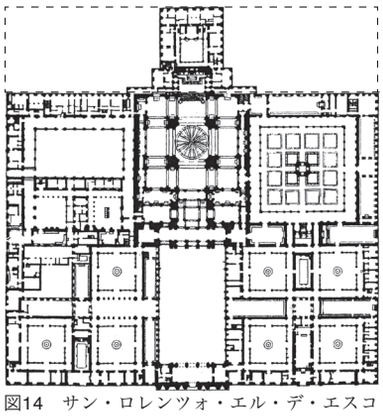


図14　サン・ロレンツォ・エル・デ・エスコリアル　平面図　1563-1584年
設計　ファン・バウティスタ・デ・トレド、ファン・デ・エレーラ
中央にある聖堂から東側へと突出するように設けられた小王宮に外接する方形を描いてみると、全体はほぼ正方形となる。

この史実をシェーアバルトは果たして知っていたのかどうかは不明である。しかしシェーアバルトの巻末の詩の表題「死の宮殿」は、タウトの「都市の冠」と対比されていることは確かだろう。タウトは「都市の冠」を精神性に満たされた都市として提案している。すなわち「都市の冠」は「死の宮殿」ではないと確信しているのだ。「都市の冠」には天上の新イェルサレムの空間構造が引用されることにより、それが至福の千年王国であることを暗にタウトは主張している。すなわち「死の宮殿」のような世俗的で唯物的な都市ではないとタウトが語っていると解釈できるだろう。しかしこの『都市の冠』を執筆後にタウトは自らが神となって「死の宮殿」をつくり、人々に託宣（たくせん）するように一方的に押しつけていた傲慢さにあらためて気付くのである。自らの固陋（ころう）な『都市の冠』の構想を否定するように執筆直後にタウトは『アルプス建築』に着手する。

第２節　バロンとベーネの精神世界

『都市の冠』には巻末のシェーアバルトの詩の前に二篇の論文が掲載されている。それはタウトがこの本のために依頼したものである。一人は政治ジャーナリストのエーリヒ・バロンであり、もう一人は気鋭の評論家アドルフ・ベーネである。この二人の論文の内容についてタウトは一切関与していない。そしてこの二人の論文には全く黙示録思想を見いだすことができない。

１．バロンの「再構築」

タウトの都市論「都市の冠」の後に登場するのがバロンの論文である。第一次世界大戦中にタウトは兵役に代わりケルン郊外の工場で働いていた。そして朋友バロンもケルンで働いていた。このため二人は日曜ごとに会い、将来の社会について議

論を重ねていたといわれる。(注61)

バロンの論文の表題は「再構築」である。この論文は現状の国家思想を批判することから始められている。権力による上からの支配をバロンは慷慨(こうがい)する。それに対して彼は非政治的な社会思想の重要性を述べている。それは個人の自我が公共精神へと結び付けられた下からの共同体の思想である。実例としてバロンがあげるのは労働組合、民衆劇場、フォルクスハウス、田園都市である。この社会的活動を鼓舞するのが芸術家であるとバロンはいう。魂を躍動させるのは詩人、音楽家、画家、彫刻家そして建築家である。しかしバロンは現状を憂いている。なぜならば民衆の権利、民衆の意志、民衆の国家という概念が矮小化されてしまっているからである。彼の理想は非政治的な社会意識がやがて宇宙的、神的、芸術的なものへ昇華されていく。現在の戦争の状況からやがて精神は解放され、民衆の新しい幸福と世界の解放へ架橋される。この希望でバロンは論文を締め括っている。

バロンの提唱する下からの共同体は、ヴァシリー・ルックハルト(1889-1972)の『労働の記念碑、〈歓喜に寄せて〉』(1920)を彷彿させずにはおかない。ルックハルトが1920年に発表した『労働の記念碑』は新しいゲマインシャフィトの姿を視覚化したものといえるだろう。それはワイマール共和国が成立した直後の、兵士や芸術家による評議会に代表されるような労働者たちのための記念碑である。中央に聳える巨大な記念碑こそ戦時中に育まれた「血のゲマインシャフト」そのものではないか。周囲を埋め尽くすように描かれた無数の小さな人々の情感は、すべて中心に聳える記念碑に注がれている。闇夜に光輝く記念碑の姿は、戦争の惨禍を体験した人々にとって、新しいワイマール共和国に託すゲマインシャフトという未来の社会への希望の象徴である。(注62)[図15]

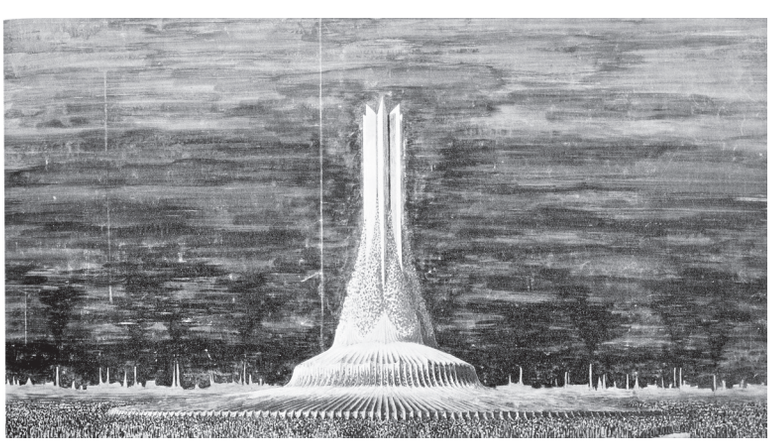


図15 『労働の記念碑、〈歓喜に寄せて〉』ヴァシリー・ルックハルト 1920年

ルックハルトが記念碑に命名した『労働の記念碑、〈歓喜に寄せて〉』とはベートーヴェンの《交響曲第九番》(1824)の第四楽章のシラーの頌歌〈歓喜に寄せて〉に因んでいる。すなわち〈歓喜に寄せて〉を建築的なアナロジーとして表現したものだ。「…私たちは炎に酔って/天上なるものよ、そなたの聖所に入る…全ての人々は兄弟となる、そなたの柔らかな翼の憩うところに…」このシラーの詩は全ての人類が兄弟となり平和に暮らす世界を詠いあげている。その理想世界とはあきらかに天上の新イェルサレムがイメージされている。すなわちシラーの詩の背後には黙示録思想が伏在している。(注63)

バロンの思想は封建的な上からの一方的支配に対するアナーキズムの理論である。人々が自我を抑制して公共的精神を獲得し、下から社会組織を構築する。その延長線上に理想の国家を位置付けている。その中間的な社会組織が田園都市でありフォルクスハウスである。人々の精神性を鼓舞する存在として芸術家の重要性が位置付けられている。すなわち芸術家こそ現状の国家体制に対抗できる重要な役割を果たすことができる存在なのだ。しかしその革命的アナーキズムの思想は危険性を孕んでいる。

詩人と国家の関係についてはすでにプラトンが『国家』のなかで語っている。すなわち模倣芸術にすぎない詩を詠う詩人とは理想国家を治めるうえで排除すべき存在である。その理由は詩人には理性が欠如しており動揺する心情を描写するからである。さらにそれが社会に悪徳を広めるからである。詩人と国家とは相いれない存在としてプラトンは位置付けている。

2. ベーネの「建築芸術の再生」

アドルフ・ベーネとタウトは同じ文化人サークルの一員であった。彼らは週末になると集まり談論風発を楽しんでいた。そこはベルリン北東50キロメートルにあるコリーン修道院のある自然豊かな田園地帯である。当時タウトはシュトゥットガルトのテオドール・フィッシャー(1862-1938)の設計事務所で働いていた。そこから通っていたのである。コリーン湖畔にある居酒屋の娘とタウトは結婚する。

ベーネは雑誌『シュトルム』などに表現主義を

絶賛する評論で当時名を馳せていた。こうした関係から論文の執筆が依頼されたのであろう。この気鋭の若き評論家は、後にタウトのガラス・パヴィリオンを賞賛する評論を書くことになる。

ベーネの論文の表題は「建築芸術の再生」である。ベーネの論文は、現在の建築芸術が没落しているという認識を前提としている。それを語るために、ベーネは絵画芸術の凋落の歴史から語り始めている。ベーネにとって絵画芸術が最も稔りの多かった時代はゴシックの時代である。その理由としてゴシックの大聖堂の空間では絵画と建築が一体となっていたからである。そこでは建築空間とステンドグラスや絵画が統合され、芸術が一つの世界観として構築されていた。そして絵画芸術がゴシックの時代から近代へと凋落していく過程をベーネは詳細に述べている。近代に至り絵画芸術は額縁のなかへ矮小化された表現芸術にまで陥ってしまったと酷薄(こくはく)なまでに断罪してはばからない。

ベーネは絵画芸術の淪落(りんらく)の歴史がそのまま建築の歴史を意味すると話を転ずる。こうした歴史を辿った建築にとって必要なものこそ「建築芸術の再生」なのである。かつてゴシック芸術が成し遂げたように、いまこそ建築は完全に刷新され「ただひとつの造形芸術」にならねばならないと危機感を訴えてベーネは論文を締め括っている。

ベーネが言及するゴシックの大聖堂の建築とはカトリック教会についてである。すなわちプロテスタント教会は偶像崇拝に対して否定的であり、内省化された信仰のなかに神と向き合う。基本的に福音主義であるためキリスト教的芸術作品に意味を見いださない。たとえばカトリック系のゴシック教会建築には長い身廊の奥に祭壇を設えるようなヒエラルキーに基づいた空間形式が認められる。こうしたカトリック教会に特有の位階制に基づく建築空間それ自体をプロテスタンティズムは否定している。

このようにベーネにはプロテスタントの黙示録思想に対する意識が全く認められない。彼の理論は聖アウグスティヌスに基づくようなカトリック教会の世界である。このため彼の論文はシェーアバルトが巻頭に掲げた黙示録思想を曖昧なものにしてしまっている。このベーネのカトリック教会の芸術理論は、後にハンス・ゼードルマイヤーにより1948年に『中心の喪失－危機に立つ近代芸術』として体系化されている。(注64)

しかしベーネの建築芸術観はそのままタウトやグロピウスにより戦後へ継承された。すなわち芸術労働評議会議長となったタウトの宣言や、グロピウスが設立したバウハウスの綱領において、建築は絵画や彫刻を統合する総合芸術という「ただひとつの造形芸術」として位置付けられている。

しかしベーネのゴシック建築に託した思いと、タウトが『都市の冠』においてゴシック建築に託した思いとは同床異夢といってよいだろう。タウトは精神性に満たされた建築としてゴシック様式の大聖堂を解釈しているからである。それはタウトにとってドイツ神秘主義にまで遡るドイツ民族を決定付けている精神性なのである。

第３節　ブルーノ・タウトの『都市の冠』(1919)

『都市の冠』ではシェーアバルトの巻頭の詩に続いて40葉の「歴史的な都市の冠」の図版が掲載されている。その後に初めてタウトの都市論が始まる。これが『都市の冠』の中心部分となる。図版の検証は第４節でおこなう。そのまえに論文を検証する。論文は田園都市としての「都市の冠」が構想された背景を諄諄(じゅんじゅん)と説明している。論文は大きく前半と後半に分けて考えることができるだろう。前半は現在の都市の分析である。そして後半はそれに基づいた田園都市「都市の冠」の提案にあてられている。

１．「頭なき胴体」から「都市の冠」へ

タウトの論文「都市の冠」の前半の章立ては「建築」「古都」「混沌」「新都市」「頭なき胴体」そして「旗を与えよ」となっている。

最初の「建築」では、現在の建築が目的的芸術となってしまっていると慷慨(こうがい)している。そしてタウトの建築の最終目的は、民衆の魂の力ともいえる信仰や希望や願望のなかに現れる「建築する意志」が造り出す建築であると説く。次の「古都」では、大聖堂を中心として信仰が人々の生活と一体化されたものとして古都をタウトは評価している。なぜならば古都は人々が生の喜びを享受している理想の都市であるからだ。古都は純粋で忠実で嘘がない。古都こそ本来の「都市の冠」であるとタウトは考えている。三つ目の「混沌」では古都が鉄道の敷設により混沌へと陥れられたことを嗟嘆(さたん)している。タウトは新しい秩序により生活と調和

した都市の構築の必要性を主張する。ここまで都市の問題点を指摘してきた。そしてここから田園都市の提案が始まる。

「新都市」では田園都市こそ新都市の理念そのものであると主張する。現代都市は経済や物流や衛生などの視点から計画されている。このため結果として精神性が失われ形式的な用途地区の計画にまで形骸化してしまっていることを指摘する。「頭なき胴体」では都市が胴体だけでできていると批判する。その胴体とは住居、庭園、公園、遊歩道、工場、商店街、学校、役所である。そしてこうした施設は都市の中央ではなく周縁にあれば充分である。都市の中心部には「頭」を構築するべきであるとタウトは説く。

最後に「旗を与えよ」でタウトは「都市の冠」の必要性を説く。その背景として宗教と人々の生活の状況について分析する。現状では宗教が個人へ還元され、都市の大聖堂は古都のような人々の精神性の中心的役割を果たさなくなっているとタウトは判断した。宗教に代わる社会思想が精神的中心の役割を担い新しい共同体を形成する。このとき建築家は社会思想を体現するものとして「都市の冠」の必要性を提案するのだ。こうしてタウトの論文「都市の冠」の前半が終わり、後半の具体的な田園都市としての「都市の冠」の設計説明へ引き継がれる。

2.「都市の冠」と田園都市

論文「都市の冠」の後半の章立ては「都市の冠」「都市の冠の経済的側面」に続き「都市の冠に向けた新しい試み、あとがき」で終わっている。論文後半の最初の「都市の冠」は既往の研究論文で取り上げられている唯一の部分である。その他の部分について論じられることはない。ここでは具体的な田園都市としての「都市の冠」の規模や都市施設について詳細に述べられている。そして多くの図面が添付されている。提案されている都市は直径７キロメートルであり、人口は30万人が想定されている。その中心部に「都市の冠」である芸術と娯楽の施設が構築される。行政施設や駅はその中心部から外れた位置にある。その「都市の冠」のさらに中央部分はクリスタルハウスとなっており、この都市の精神的世界観を象徴している。そこは人々の最高の歓愛で満たされる空間となっている。

「都市の冠の経済的側面」では建設費用について言及されている。田園都市「都市の冠」の建設費は四期に分けて段階的に詳述されている。そして最後にこの非目的的なクリスタルハウスの建設が共同体にいかなる経済的な負担にはならないという遁辞（とんじ）で締め括られている。

「都市の冠に向けた新しい試み、あとがき」では近代の都市計画の歴史をイギリスの田園都市レッチワースからドイツ、アメリカ、オーストリア、オーストラリア、ベルギーそしてオランダにおける新しい都市の事例をもとに分析している。そして最後に都市が芸術であらねばならないと結論付けている。

第４節　黙示録の都市としての『都市の冠』

タウトは『都市の冠』の本論となる「都市の冠」の前半では経済的な合目的建築を否定しいる。その一方でタウトは自らの田園都市構想が単なる表現主義のユートピアとなることを危惧している。このため現実的な建設費を詳細に論じて空論ではないことを主張する。しかしこの「都市の冠」は机上論にすぎない。なぜならば敷地はどこまでも平坦であり、直径７キロメートルの都市の外側には無限の田園が広がっている。具体的な場所は想定されていないからだ。そもそも巻頭のシェーアバルトの詩「建築の黙示録」を考えてみても明らかなように、この「都市の冠」は黙示録思想に基づく新イェルサレムとしての観念上の都市であるからだ。その根拠はタウトが参考として掲載した40葉の「歴史的な都市の冠」の事例のなかにある。

1.「歴史的な都市の冠」と新イェルサレム

タウトがイメージしている「都市の冠」は、まず巻頭の《聖女バルバラ》の背景に描かれたゴシック様式の塔において示されている。それに続いてシェーアバルトの巻頭の黙示録の詩が続く。それを継承するものが、詩に続いて掲載された「歴史的な都市の冠」の40葉の図版である。指摘したいことはここに『都市の冠』が黙示録であることが確認できる図版が一枚掲載されていることである。

タウトは油絵やエッチングや写真などの図像を引用している。40葉のうち27葉がヨーロッパに実在する「都市の冠」である。たとえばモン・サン・ミッシェルやシュトラスブルク、ケルンの大聖堂

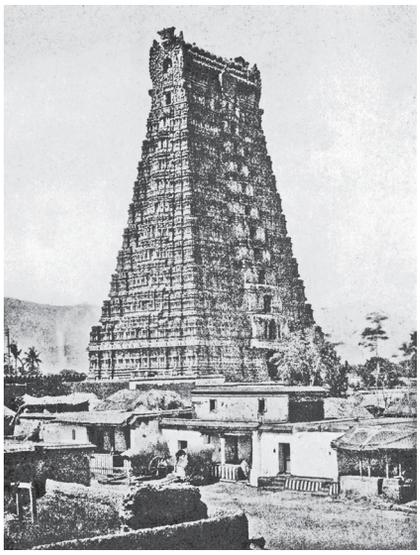


図16　タウトが「歴史的な都市の冠」の事例として11番目に取り上げた、南インドのマドライにあるミーナクーシ寺院のゴープラと呼ばれる塔門
ブルーノ・タウト『都市の冠』の「歴史的な都市の冠」、1919年

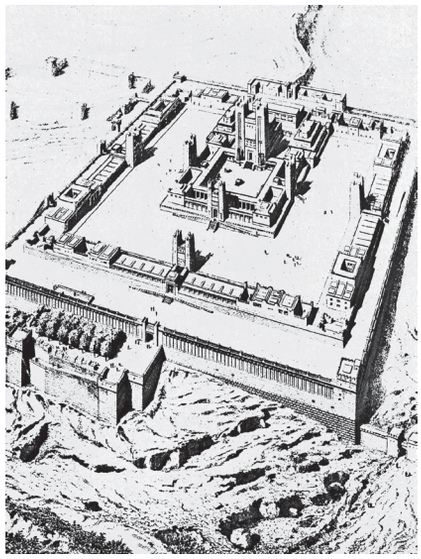


図17　タウトが「歴史的な都市の冠」の事例として12番目に取り上げた、『エゼキエル書』の解析から構想された新イェルサレムのソロモン寺院の復元透視図。
ブルーノ・タウト『都市の冠』の「歴史的な都市の冠」、1919年

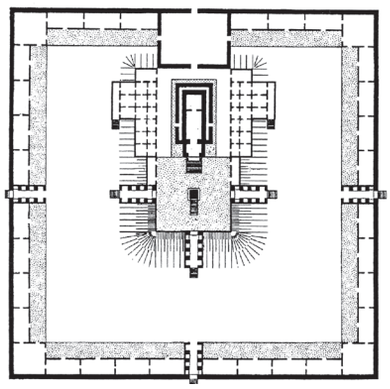


図18　『エゼキエル書』の新イェルサレムの記述に基づいて復元された「歴史的な都市の冠」の12番目の事例に該当するソロモン神殿の平面図

やプレンツラウの教会などである。その次に多いのはアジアの仏教やヒンズー教の寺院である。８葉が数えられる。たとえばアンコールワットやラングーンのパゴダあるいは南インドのマドライの寺院などである。しかし興味深いのは南インドのヒンズー教の寺院が３葉も掲載されていることである。それは図11、図34、図41である。しかしこの３葉ともクローズアップされたその写真は寺院の門塔ゴープラである。本尊が祀られている本殿ではない。南インドのヒンズー教寺院では、高さ60メートルに達する特異な塔門をもつ。インドでは塔門は人々の精神的な崇拝の対象とはなっていない。寺院の中央に本殿がある。しかし本殿は平屋の陸屋根の簡素な建築物である。どうもタウトのお気に召さなかったようである。［図16］さらに４葉が中近東のモスクや都市である。アッシリアやカイロなどが掲載されている。

しかし39葉の図が現存する実際の都市や建築であるのに対して、１葉だけが想像の都市の復元図となっている。それは第12図である。図のキャプションには「イェルサレム、ソロモン寺院、復元図」とある。17世紀から18世紀にかけて研究された新イェルサレムあるいはソロモン寺院の一連の復元図のなかの一つである。［図17］［図18］

これが20世紀の時代に撮影されたイェルサレムの現地の写真や図面であるならば問題はない。しかしここに掲載された復元図とは17世紀ころに描かれた架空の想像図である。すでにイェルサレムは18世紀ころからは考古学的調査がおこなわれるようになっている。しかしタウトは本来のイェルサレムの都市ではなく、聖書のなかで幻視された都市像に「都市の冠」の姿の理想を見出している。すなわちこの図はあきらかに『エゼキエル書』と『ヨハネの黙示録』でエゼキエルとヨハネが天上の新イェルサレムを幻視した記述の分析に基づいて構想された黙示録のなかの千年王国としての新イェルサレムの想像図である。

すなわちタウトはこの40葉の図版のなかに世界の終末に降臨してくる天上の新イェルサレムの復元図をなにげなく紛れ込ませていたのだ。タウトは巻頭の《聖女バルバラ》に始まり、巻頭のシェーアバルトの詩「建築の黙示録」を経て、それに続く「歴史的な都市の冠」の40葉の図版のなかの新イェルサレムの復元図へと読者を巧みに誘導している。『都市の冠』とは明らかに恣意的に黙示録思想に従って編集されたものなのだ。それは確信犯的な精妙な編集の手法と解釈できるだろう。その意図はタウトが「都市の冠」があたかも田園都市論であるかのように装いながら、じつは第一次世界大戦の勃発という世界の終末が差し迫ったときに、黙示録思想を背景とした黙示録の理想都市を語っていることである。それをあえてあからさまに表現しようとしていない。理解できる読者に対してだけ判るようにして伝えている。

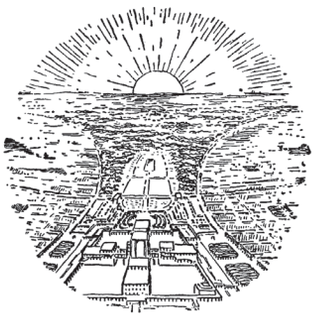


図19-1 「都市の冠」西側からの鳥瞰図　1919年
設計　ブルーノ・タウト

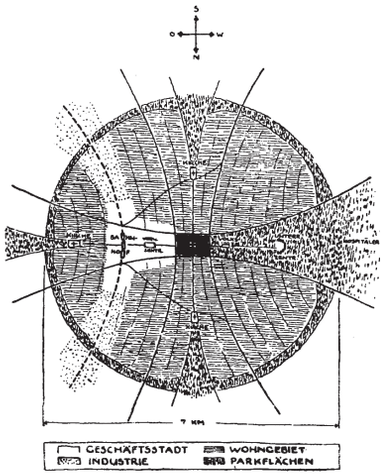


図19-2 「都市の冠」都市全体図　1919年
設計　ブルーノ・タウト

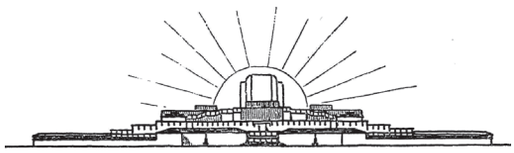


図19-4 「都市の冠」中心部　西側立面図
ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

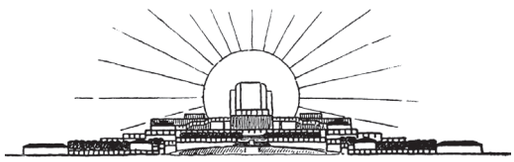


図19-5 「都市の冠」中心部　東側立面図
ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

図19-3 「都市の冠」 透視図　ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

バロンとベーメの二人は、タウトの黙示録の意図を察することができなかった。二人の論文には黙示録思想が欠如している。このため黙示録思想の連続性が中断されないように二人の論文は後半にまとめて掲載されたと考えられる。そしてタウトの田園都市が黙示録の都市であることを主張するために、巻末にシェーアバルトの黙示録的な詩である「死の宮殿」が引用されたのだ。こうすることによりタウトの『都市の冠』は黙示録文学として完結することになる。

2.『都市の冠』と都市の黙示録

タウトの「都市の冠」の田園都市全体の規模は直径７キロメートルである。市街地の面積は約40平方キロメートルであり、人口は30万人が想定されている。市街地を拡張した場合には50万人まで許容できるように計画されている。この円形の都市にはクサビ状に大きな緑地が都市の中心部へと突き刺さるように入り込んでいるのが特徴的である。それが新鮮な空気を都市内部へと供給する。緑地には学校や病院や教会が計画されている。[図19-1、2、3、4、5]

タウトが田園都市の中心部に設計した「都市の冠」の広さは800メートル×500メートルとなっている。ここには芸術と娯楽に必要な施設が全て計画されている。すなわち中心部にはオペラハウス、劇場、フォルクスハウス二棟が計画されている。その周辺は中庭とテラスを持つ柱廊が囲んでいる。そこには社交場や水族館や温室が設けられている。さらに外側の柱廊にそって、博物館と中央図書館がレストランやカフェとともに設けられている。[図19-6、7、8]

「都市の冠」の計画は厳密に太陽の運行方位に合わせて東西南北の軸にそって配列されている。中心部の四棟の大きな施設は中央の水晶館すなわちクリスタルハウスにより連結されている。クリスタルハウスとはプリズムガラスから成る立方体の透明の空間である。その内部には何もない。劇場から出てきた人々は太陽光に貫かれたクリスタルハウスを最高の歓愛で満たすのだ。クリスタルハウスこそ新しい生活の喜びを象徴する田園都市という精神的な都市の「頭」の象徴である。(注65)[図20]

「都市の冠」の中心部の平面構成は一見複雑である。しかし九つの格子状に分節された正方形という単純な空間構造から成り立っていることが理解できるであろう。そしてその外側の800メートル×500メートルの大きさの「都市の冠」自体も長方形でありながらその図面からは、良く見ると格子状の空間構成が浮上してくる。すなわち「都市の冠」はまず大きな九つの格子状に分節されている。そしてその長方形の中心部の正方形部分が、さらに九つの格子状へと分節されている。こうして入れ籠状に格子構造が組み込まれているという

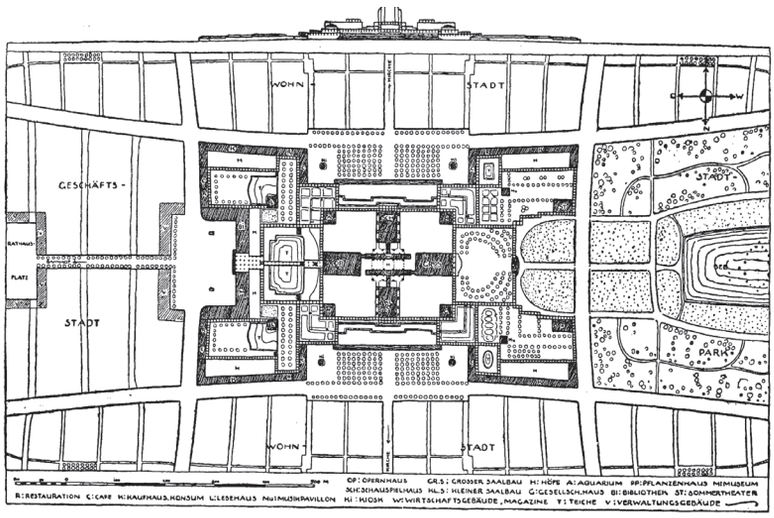


図19-6 「都市の冠」中央部平面図、立面図　1919年　設計　ブルーノ・タウト

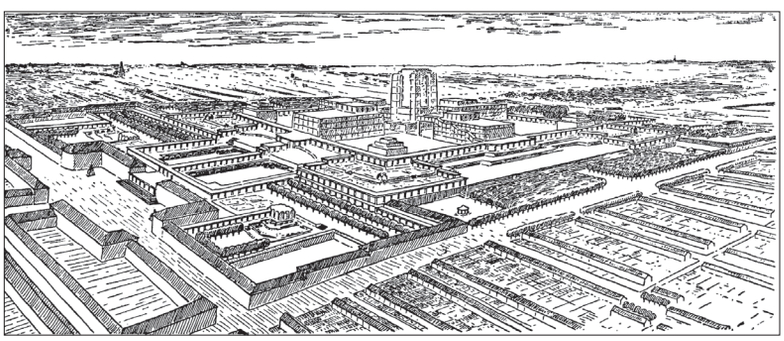


図19-7 「都市の冠」中央部分透視図　1919年　設計　ブルーノ・タウト

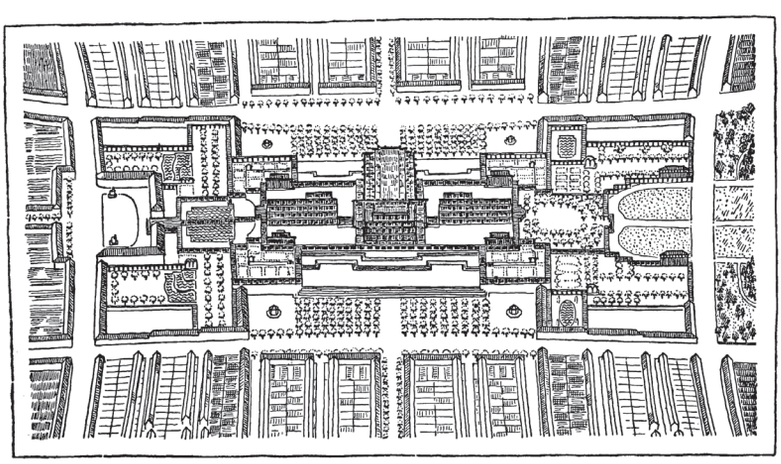


図19-8 「都市の冠」中央部斜投影図　1919年　設計　ブルーノ・タウト

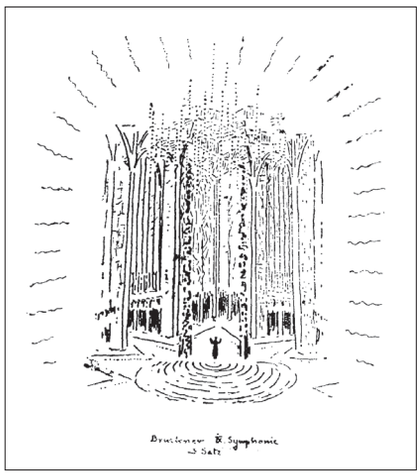


図20 「天の家」1920年、『曙光（フリュー・リヒト）』設計　ブルーノ・タウト

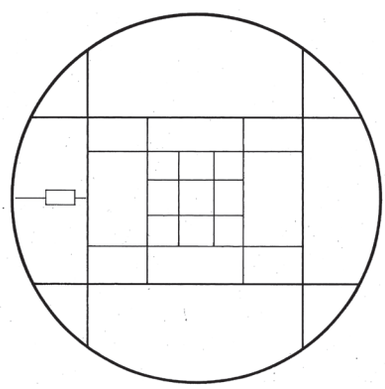


図21 「都市の冠」都市空間構成図　筆者作成

精微をつくした空間構造となっていることが判る。これはまさに『エゼキエル書』と『ヨハネの黙示録』に記された天上の新イェルサレムの構造を基にした空間構成による都市であると解釈することができるだろう。[図21]

タウトの「都市の冠」の大きさは800メートル×500メートルである。この800メートルという長さはおよそ½マイルである。この大きさはジョン・ダヴェンポート（1597-1670）がアメリカのコネティカット州に1638年に造ったニューヘイヴンという正方形の都市の外郭の一辺と同じ大きさである。ニューヘイヴンとは『エゼキエル書』を基にして黙示録思想を背景に構築された都市である。その都市の大きさや空間構造は全て聖書から導き出され決定されているのだ。(注66)[図22]

あらためて「都市の冠」の中心部にもう一度目を移してみよう。クリスタルハウスが建つ中心の正方形部分はおよそ250メートル×200メートルである。その正方形の空間には、十字に配置された施設により四つの中庭が形成されている。この空間構成はソロモン神殿の空間構成に酷似している。それはスペインのセバスティアン・カスタリオンが1551年に『エゼキエル書』を分析して描いたイェルサレムに基づいたソロモン神殿である。カスタリオンのイェルサエムの分析に基づくソロモン神殿では、その中心部に神殿がある。タウトの「都市の冠」では、この神殿に該当する位置にクリスタルハウスが建っている。両者において中心部は、ともに神が降りてくる虚無の空間となっている。そしてこの中心部の空間は二つの前室を経ること

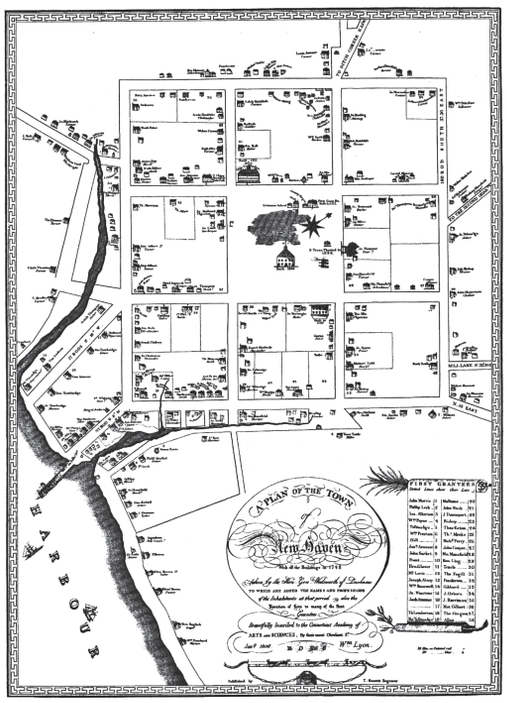


図22　黙示録の都市ニューヘイヴン、コネティカット州
1638年（地図は1748年当時のもの）
設計　ジョン・ダヴェンポート

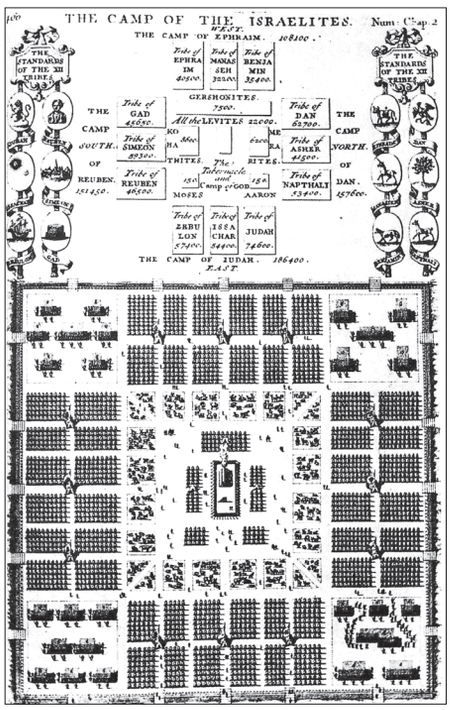


図24　ユダヤ民族の砂漠の野営天幕配置図　1730年
アーサー・ベッドフォード

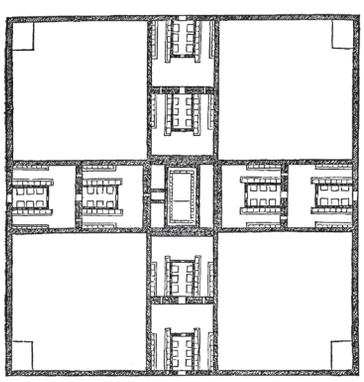


図23　エゼキエルが幻視した新イェルサレムのソロモン神殿の平面図　1551年
セバスティアン・カスタリオン

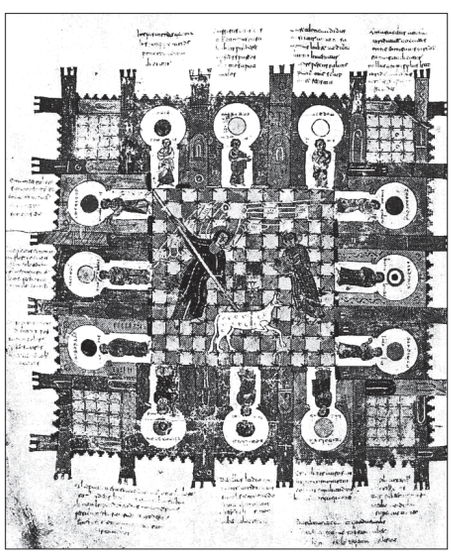


図25　『ヨハネの黙示録』天上のイェルサレム、『ベアートゥス注釈書』10世紀

によってしか到達することはできないのだ。さらに「都市の冠」の四つの中庭に設けられているのは、中庭の入隅にある社交場である。この部分もカスタリオンの天上の新イェルサレムに基づくソロモン神殿の復元図の空間構造と非常によく似ている。(注67)［図23］

さらに興味深い点は「都市の冠」における行政施設の配置である。コネティカット州のニューヘイヴンでは、ダヴェンポートの住宅を中央の広場の東側に建てていた。その理由はイスラエル十二部族が野営するときに、モーセが中央礼拝所の東側に天幕を張っていたからであった。そしてタウトの田園都市においては行政施設が、中央部の「都市の冠」に対し東側の外側に配置されていることが分かるであろう。［図24］

タウトの「都市の冠」からは入れ籠状になった格子構造をはっきりと読み取ることができる。それはダヴェンポートがコネティカット州に建設したニューヘイヴンの黙示録思想に基づいた都市と比較することでより明らかとなる。「都市の冠」にはまさに『ヨハネの黙示録』と『エゼキエル書』に記された天上の新イェルサレムの都市構造が内

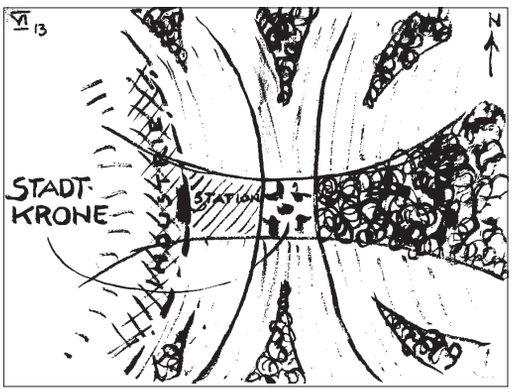


図26　日本の講演のときに描かれた「都市の冠」の中央部分のスケッチ
ブルーノ・タウト、1933年

含されていると解釈してよいだろう。[図25]

『都市の冠』とは第一次世界大戦の最中にタウトにより黙示録思想に基づいて書かれた田園都市というユートピア都市である。多くの人々が犠牲となり多くの都市が破壊されている世界の終末に描かれた『都市の冠』とは、聖書に記された新イェルサレムに基づいて描かれた救済としての千年王国の予言者なのである。

この「都市の冠」の図面だけを見ると、こうした黙示録的な解釈がいささか牽強付会と思われるかもしれない。しかしタウトはもう一枚の興味深い概念図を残している。それはタウトが日本へ亡命してきてから描いたものである。タウトは日本で講演を依頼されたときに一枚の「都市の冠」の概念図を描いている。このスケッチには田園都市の全体像ではなく中央の「都市の冠」だけが大きく中央に描かれている。その「都市の冠」はほぼ正方形であり、九つの空間へと分節されていることを明瞭に読み取ることができる。この概念図は明らかにダヴェンポートと同じ単純明解な新イェルサレムの空間構造をタウトが「都市の冠」に想定していたことを物語っている。(注68)[図26]

進歩という概念は救済思想が世俗化されたものにすぎない。近代とは世俗化された歴史という現実のなかで合理的なユートピアが追求された黙示録の時代である。この合理主義に裏づけられた普遍的精神は、神の世界を歴史のなかに埋没させてしまった。そして神に代わり人間が歴史を動かす原動力と解釈された。人間はこうして自ら歴史の終末にユートピアの建設を目指すのだ。ドイツの世紀転換期を特徴付ける生活改革運動や田園都市運動とは宗教思想が世俗化された世界の終末の社会現象である。ドイツ表現主義のユートピアの都市構想にはメシア的な黙示録思想が伏在している。

3．ブルーノ・タウトと黙示録思想

タウトの「都市の冠」の空間構造は聖書の記述から導き出された新イェルサレムの空間構造に酷似している。しかしその格子構造自体はありふれた合理主義の都市構造と思われるかもしれない。確かにバロック時代の新しい設計手法として格子構造の都市は幾つも認められているからである。しかしタウトの経歴をあらため振り返ってみると興味深い事実が認められる。それがタウトの『都市の冠』を黙示録の都市であると確信させているのだ。

タウトが生まれ育ったのはケーニヒスベルクという都市である。ここはフリードリヒ・ヴィルヘルムⅠ世（1688-1740）が移民政策により東プロイセンの再建に力をいれた最前線の都市であった。このケーニヒスベルクをはじめとして当時のプロイセンは聖職から軍隊そして学校までドイツ敬虔主義に貫かれていた。1730年代においてケーニヒスベルクはドイツ敬虔主義の牙城であった。それはケーニヒスベルクでカント（1724-1804）が生まれた育った時代である。カントの『実践理性批判』における道徳と宗教の関係から構築された倫理の概念には、このドイツ敬虔主義が反映されていると考えられる。もちろんタウトが生まれた1880年代において厳格なあるいは篤い信仰は衰退していた。ここでタウトは1902年まで暮らしていた。(注69)

ドイツ敬虔主義はドイツ神秘主義と融合し、黙示録思想を近代へ架橋したプロテスタンティズムの一派である。薄らいだとはいえタウトはこのドイツ敬虔主義の空気に満たされた社会で生まれ育ったのである。そしてタウトは1904年からシュトゥットガルトのテオドール・フィッシャーの設計事務所で修業時代を過ごす。それはタウトが27才の1907年まで三年間続いた。

シュトゥットガルトはヴュルテンベルク地方の中心的都市である。そしてシュトゥットガルトはライン川から分岐したネッカー川に位置している。このヴュルテンベルク地方もまた17世紀から18世紀にかけてドイツ敬虔主義の中心地であった。20世紀においてもシュトゥットガルトはハンブルクと並んでドイツ近代のメシア思想の中心地の一つであった。神の世界が崩壊した近代においても、ワイマール共和国という社会主義国家へ千年王国の黙示録思想を結び付けて考えていた地域なのである。(注70)[図27]

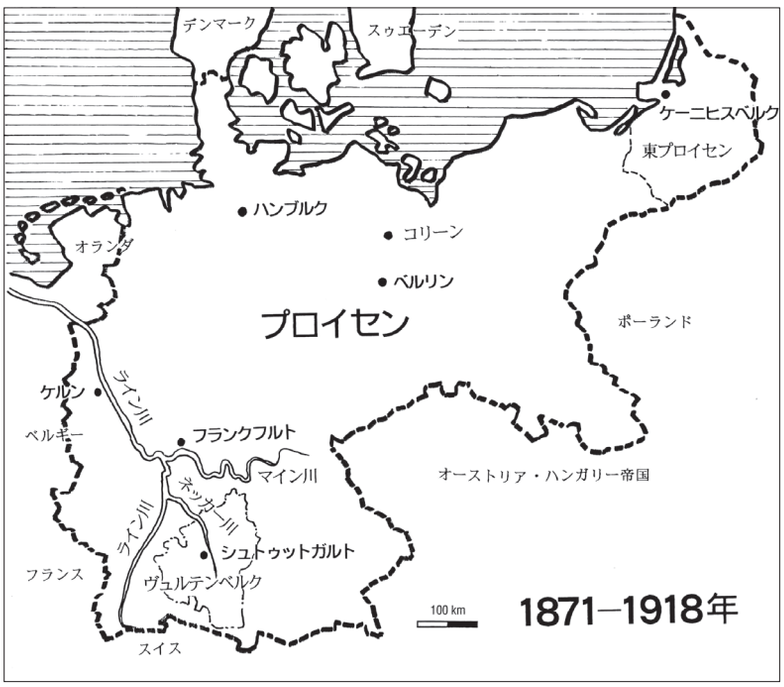


図27　ライン川流域とヴュルテンベルク地方の中心都市シュトゥットガルト
筆者作成

このようにタウトが27才まで過ごしたのはドイツ敬虔主義の中心地がほとんどであった。この事実がそのままタウトが敬虔主義であったということを意味しているわけではもちろんない。しかしタウトを取り巻く環境はほかのドイツの地域に比較しても特異な地域であった。すなわちここはドイツ神秘主義と融合したドイツ敬虔主義の黙示録思想が伝統的に近代に至るまで潜在していた地域であったことはあらためて確認しておいてもよいだろう。タウトが信仰していなくとも知識として黙示録思想を充分知り得ていたことは推察できる。このようなタウトの多感な青年時代の生活環境を考えた場合、『都市の冠』の都市構造が黙示録に基づいた都市空間に酷似してたことが単なる偶然に過ぎないと断定することはできないだろう。

タウトの都市を黙示録思想として読む理由がもう一つある。それはタウトのドイツ革命のときの振舞にある。ワイマール共和国の樹立の11月革命の直前にバイエルン革命があった。このとき樹立されたレーテ共和国は一ヶ月で崩壊した。この革命でタウトは建設大臣として推挽(すいばん)されていたのだ。もちろんそれは実現しなかった。しかしワイマール共和国が樹立されるとタウトは芸術労働評議会の議長となる。このロシア革命の影響を直接受けて成立した評議会は、本来プロレタリアートによる革命組織であるべきものだ。しかしタウトはブルジョアジーであった。そして芸術労働評議会は「芸術」と「労働」という相矛盾する言葉を合成して造られた疑似プロレタリアートの組織に過ぎない。このような、タウトの振舞からハンガリーのルカーチの世俗化された黙示録的な革命思想が想起されるのだ。

すなわちブルジョア階級に属していたジェルジ・ルカーチ（1885-1929）はプロレタリアート側へと転じた。そしてハンガリー革命評議会の主要メンバーとして革命運動の唯中に身を投じている。彼は革命的な共産主義のテロリズムを容認し正当化していたのだ。それは真の民主主義を達成する手段ながら法治国家における手続きではなかった。メシア的な革命ユートピア主義をルカーチは実践し、そして挫折した。(注71)

ハンガリーにおけるプロレタリアート革命とは黙示録思想が世俗化されたものである。プロレタリアートがメシアに仕立て上げられて民主主義という「神の国」の実現を目指したものと解釈されている。ルカーチの振舞はワイマール革命のときのタウトに重なってくる。タウトもブルジョアジーでありながら芸術労働評議会という偽プロレタリアートを自称していた。そして自らを革命のために選ばれたメシアとして認識し振る舞い自己陶酔していたように映るのだ。彼がおこなった一連の宣言という名の挑発的なアジテーションはまさに神の啓示を代弁する予言者による黙示録思想そのものである。

4．新イェルサレムとしての色彩建築

タウトは『都市の冠』には掲載していない「都市の冠」の絵を一枚残している。それは1917年に息子ハインリヒのために彼が描いた水彩画である。大きさは30センチメートル×46センチメートルのアクソノメトリックの「都市の冠」である。青写真をベースとして水彩絵の具で極彩色に染めあげられている。この青写真は『都市の冠』に掲載されたアクソノメトリックの下図と考えられる。[図28]

この「都市の冠」の水彩画から想起されるのはシェーアバルトの巻頭の詩「新しい生－建築の黙示録」のなかの次の部分である。「純粋な巨大なダイヤモンドでできた大きな城郭は、薄明かりの中へ晴れやかにその色彩の炎を振りまく。」「城館を覆うエメラルドのドームは内側から照らされて黒いビロード状の天空に円錐形の緑色の光を放ち、ゆっくりと動く。」「何千もの色を有するガラス窓を通って流れ出る静かな光は、聖なる彩りを持ち、

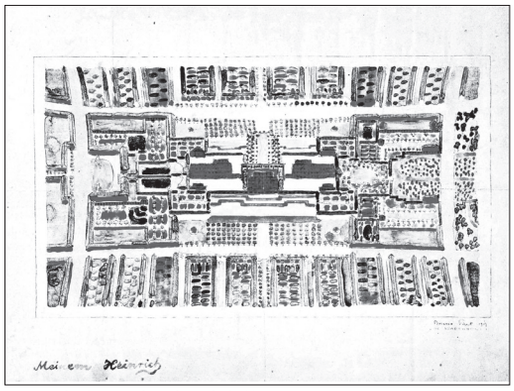


図28　都市の冠中心部　斜投影図
息子ハインリヒのために彩色された都市の冠
ブルーノ・タウト『都市の冠』1919年

図29　『アルプス建築』
第26葉「大聖堂の星」
ブルーノ・タウト、1919年

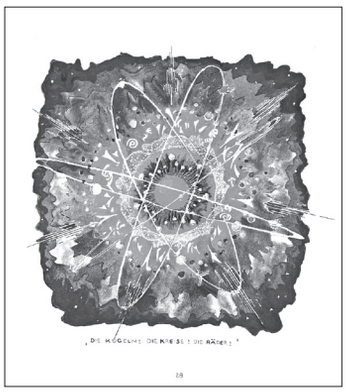


図30　『アルプス建築』
第28葉「球体！円環！車輪！」
ブルーノ・タウト、1919年

図31　彩色されたマグデブルク市庁舎、
1921-1924年

図32　ダーレヴィッツの自邸のインテリア 改修後　1997年現在
ブルーノ・タウト、1926-1927年

図33　ドイツ工作連盟展ヴァイセンホフ・ジードルンクの鳥瞰写真、1927年

癒しの煌めきを見せる。」(注72)すなわちこれはヨハネが幻視した天上の新イェルサレムの姿である。『ヨハネの黙示録』では「城壁は碧玉で築かれ、また都はみがかれて透き通ったガラスのように輝く、純金で築かれていた。」「そして都の大通りは透き通ったガラスのように輝く純金でできていた。」(21:19、21)というように黄金に輝く都市として描写されている。

タウトが絵の具で彩ったこの「都市の冠」では、黄色に輝く中央のクリスタルハウスとそれを取り巻く臙脂(えんじ)色の回廊が特徴的である。これは明らかに新イェルサレムとして描かれたものなのではないだろうか。

そのように考えてみるとタウトが次に描いた『アルプス建築』の第26葉「大聖堂の星」の暗黒の宇宙に輝く聖堂から構成された星の姿や、あるいは第28葉「球体！円環！車輪！」に描かれた地球の姿は、シェーアバルトの「新しい生　建築の黙示録」のなかの「きらきらと光輝く何百もの新しい宮殿を取り出す。そして彼らは地球という名の雪球をこの宮殿群で飾り、色とりどりにし、そして強く輝かせる。」という詩文を彷彿とさせずにはおかない。(注73)[図29][図30]

こうしてタウトはマグデブルクの都市 (1921-1923)もダーレヴィッツの自邸 (1926)も極彩色に染め上げていく。[図31][図32]

そして1927年にはドイツ工作連盟展のヴァイセンホフ・ジードルンクが、ドイツ敬虔主義の中心地であるバーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルト郊外の丘の上に建設されたのだ。それはまさに神の光に満ちた聖なる都市であった。その丘の頂部の中央に建てられたの建築の一つがタウトの設計した住宅である。その外壁は真紅に塗り込められ、夕陽が射すと周囲の白いの建築群を炎のような赤い反射光で染め上げた。その光景は人々をあたかも火事が起きたと錯覚させたといわれている。[図33]

5．『都市の冠』から『アルプス建築へ』へ

タウトの「都市の冠」は人々に至福の世界をもたらす理想都市として提案された。タウトは精神共同体を造るのが建築家の使命であると考えている。人々は自らが美という崇高な精神性のもとでこの「都市の冠」の構成員であることを自覚するのだ。タウトにとって建築家は聖職者にも似た神聖な天職なのである。

しかしタウトが1917年8月に『都市の冠』の原稿を出版社に提出してから三ヶ月後の1917年11月2日付の妻宛の手紙ではこの『都市の冠』が失敗であると吐露している。「昨日の朝に私にははっきり判った。「都市の冠」とはもう時代遅れなのだ。都市を壮麗に建造してそこに冠を築き上げるのは、人間をこれ以上進展させることがないからだ。この「都市の冠」は孤高のものにしてしまうだけだ。そして人々に大きな課題を強いることになる。全てのものがこの課題、すなわち最高位にある美へと従属させられてしまうのだ。」

この手紙は万聖節のためケルン大聖堂を訪れた日である1917年11月1日の翌日に書かれている。すなわちタウトが「アルプス建築」についての講演を親しい友人たちに対しておこなった翌日のことである。このころタウトは次のユートピアの本である『アルプス建築』の構想をすでに立てていた。そして妻への手紙には続けて「聖なる精神の共同体（リンク）を造らなくてはならない。」と決意を語っているのである。(注74) じつはタウトは万聖節にケルン大聖堂での説教で民族戦争への反戦の意志を再確認している。その二週間後に『アルプス建築』は着手された。『都市の冠』が出版される前の1918年の夏までに、タウトは『アルプス建築』の原稿を書き上げている。そして1919年にはフォルクヴァング社で『アルプス建築』の印刷製本は完了していた。『都市の冠』が1919年2月に出版された。それから丁度一年後の1920年2月に『アルプス建築』は出版された。

タウトは自分が神に代わって託宣（たくせん）するように天から理想都市を降臨させていたことに気付いたのであろう。あきらかに「都市の冠」とは黙示録思想に基づいた田園都市という名の新イェルサレムである。神となったタウトが完璧に創造した垂直のユートピアとしての黙示録の都市である。すなわちそれはバロンが主張するような下から構築した理想都市ではないことは明らかである。またドイツを中心とした狭隘な理想都市の思想はカントが提唱した世界市民からもほど遠いものであった。精神的共同体を謳いながらもタウトが提案した理想都市は既往の唯物的な施設の複合体にすぎなかったのだ。さらにタウトが信じて疑わない美のもとで、歓喜の涙を流し人々は有り難くそれを享受することが強いられていた。タウトの「都市の冠」とはシェーアバルトが巻末の詩で言及していた「死の宮殿」そのものにすぎなかったのだ。

図34　『アルプス建築』第10葉「万年雪と氷の山頂」
ブルーノ・タウト、1919年

こうしてタウトは《聖女バルバラ》にもう一度立ち返るのである。神に代わって天上から理想都市を人々に賜与（しよ）するのではなく、大地から人々自らが立ち上げるのだ。タウトは母系原理である大地という自然の摂理を再確認しそれに高い精神性を託した。生成の原理を包摂した生きた自然の生命衝動こそ、自らの意味や価値を創造していくものなのだ。こうしてタウトはバロンの論文に諭されたかのよに下からの精神共同体に未来の可能性を見いだそうとした。それは2600年来ヨーロッパ精神を規定していた黙示録思想への訣別を意味している。タウトは『アルプス建築』で「聖なる精神の共同体（リンク）」を想像を越えるような大胆な提案により表現してみせたのである。すなわち造山運動という自然の生成原理を象徴するアルプスの山岳をクリスタル化してしまうのだ。それは1915年に反戦のハンストで逝ったシェーアバルトのガラス建築の構想を世界平和のもとで宇宙にまで展開させたものといえるだろう。［図34］

注釈

第Ⅰ部　黙示録文学と千年王国思想

第１章　『ヨハネの黙示録』の成立

注1 ファニー・ドゥルーズ、ジル・トゥルーズ、鈴木雅大訳『情動の思考－ロレンスの『アポカリプス』を読む』朝日出版、1986年、p.4.

注2 ロレンスは『ヨハネの黙示録』を粗悪きわまる文学的偽造として批判している。ユダヤ教やキリスト教の福音書では簡素な世界の物語であるが、それを否定するような幻覚に満ちた徹底的破壊が『ヨハネの黙示録』には組み込まれている。それは明らかに異教の文化のコスモスを源泉としている。注1、pp.4-31.

注3 回覧書簡である『ヨハネの黙示録』は七つの教会に宛られている。その小アジアの七つの教会とは北からペルガモ、テアテラ、スミルナ、サルデス、ヒラデルヒヤ、エペソ、ラオデキヤである。泉治典『ヨハネの黙示録を読む－再臨と神の国』新教出版、2003年、pp.13-16.

注4 マルタ・ヒンメルファーブ、高砂俊一訳『黙示文学の世界』教文館、2013年、p.117.

注5 黙示録文学では『ダニエル書』のなかの四つの王国とキリスト教帝国の位置付けが繰り返し登場してくる。『ダニエル書』が書かれたころはアレクサンドロス大王が世界を支配していた時代である。当時の四王国とはバビロニア、メディア、ペルシア、ギリシアであった。しかし『第四エズラ書』が書かれたころにはアレクサンドロス大王は過去のものとなりローマ帝国が支配する時代である。このため四つの王国の最後のギリシアはローマ帝国へと書き替えられている。注4、pp.199-200.

注6 イエスは地上のイェルサレムの神殿を批判しその倒壊を予言した。イエスのいう新イェルサレムとは天上の「神の国」そのものと考えられる。大貫隆『終末論の系譜－初期ユダヤ教からグノーシスまで』筑摩書房、2019年、p.183.

注7 ヨハネの新イェルサレムには神殿がない。神殿は神と子羊である。土台は十二使徒である。城壁と城門がイスラエルの十二部族とされている。新イェルサレムとは子羊を中心とした人間の集合体である。注6、pp.446-448.

注8 注3、pp.23.

注9 佐竹明『黙示録の世界』新地書房、1987年、pp.64-189.

注10　大木英夫『終末論』紀伊國屋書店、1994年、pp.62-74.

注11　エゼキエルが幻視した天上の神殿である新イェルサレムは宇宙の神殿となっており唯一神ヤハウェは宇宙全体である神殿そして玉座そのものと解釈されている。注6、p.25.

注12　ジョルジュ・ミノワ、菅野賢治、平野隆文訳『未来の歴史－古代の預言から未来研究まで』筑摩書房、2000年、pp.144-146.

注13　神学的な終末論は黙示とは無関係である。本来の救済論と別なものである。しかし現在では『ヨハネの黙示録』を起点としてキリスト教の救済思想が解釈されるようになった。それは好奇心を満たすための単なる思弁にすぎない。クラウス・コッホ、北博訳『黙示文学の探求』日本基督教団出版局、1998年、pp.24-25.

第２章　黙示録文学の成立と垂直のユートピア

注14　注13、pp.25-36.

注15　注9、pp.20-22.

注16　カール・マンハイムによると、カトリック教会は千年王国説を、抑圧された階層のユートピア的な意識の存在構造であると定義している。これによりカトリック教会は超越的な存在論を骨抜きにした。このため革命は起きなかった。木塚隆志『トーマス・ミュンツァーと黙示録的終末観』未来社、2001年、pp.19-21.

注17　注6、pp.115-119.

注18　佐藤敏夫『永遠回帰の神話と終末論－人間は歴史に耐えうるか』新教出版社、1991年、p.65.

注19　「神の国」という禁欲的なユートピアでは絶対的な排他性が特徴的だ。それは人間の自律的な存在を否定している。「神の国」の実現は神の行為であり、人間自身で造り出すことはできない。自由な人間の願望としての世俗的なユートピアと対立した概念である。金井新二『「神の国」思想の現代的展開』教文館、1982年、pp.306-309.

注20　聖アウグスティヌスの『神の国』では永遠の安息地は水平のユートピアであった。しかしトマス・アクィナス（1225-1274）の『神学大全』(1226)において聖アウグスティヌスの歴史神学的なものが失われた。そこでは宇宙存在論的な構造が出現している。そして人間の魂の天的世界への上昇が記されており垂直のユートピアへ変化している。ダンテ（1265-1321）の『神曲』(1321)では第3篇天堂篇においてベアトリーチェに導かれて天上世界へ上昇する。注10、p.107.

第３章　千年王国思想と黙示録

注21　注6、p.447.

注22　ジャン・ドリュモー、永見文雄、西澤文昭訳『恐怖心の歴史』新評論、1997年、pp.371-373.

注23　エイレナオス（140～202頃）は紀元後数世紀におけるキリスト教千年王国思想の擁護者である。彼は聖ヨハネの後継者であり、千年王国思想的類型論のもっとも完璧な説明を与えた人物である。またテルトゥリアヌス（160-220）はエイレナオスから影響を受けた人物である。彼は『マルキオン駁論』を著しキリストの再臨が間近であると予告していた。ジャン・ドリュモー、小野潮、杉崎泰一郎訳『楽園の歴史Ⅱ－千年の幸福』新評論、2006年、pp.34-38.

注24　イエス処刑後に離散した直弟子たちが再びイェルサレムに戻り小さな集団を形成した。これを「イェルサレム原始教団」という。その後パレスティナで広まったものを「パレスティナ・ユダ人ヤキリスト教」と呼ぶ。またオリエントのユダヤ教徒による「ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教」そしてギリシア語を話す異教徒の「ギリシア語を話す異邦人キリスト教」がある。パウロは「ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教」に属していた。注6、pp.180-181.

注25　注6、pp.447-448.

注26　注10、pp.104-105.

注27　池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』名古屋大学出版会、2007年、pp.485-486.

注28　小黒康正『黙示録を夢みるとき－トーマス・マンとアレゴリー』鳥影社、2001年、p.79.

注29　中世ヨーロッパではスコラ哲学の論理的構造が宇宙の構造を決定付けていた。宇宙では地球が一番内側にある。宇宙の一番下の点である。そして一番外側にある原動天の上の方に神の住む至高天がある。幾つもの天球が同心球状に配置されている。またスコラ哲学は終末のプロセスも決定付けている。終末とは歴史的時間を去り永遠に入る瞬間である。死後に審判を受けて浄化され復活する。生命は神と一体化する。祝福された人々は永遠に存在する。ジェフリ・バートン・ラッセル、野村美紀子訳『天国の歴史－歌う沈黙』教文館、1998年、pp.170-184.

注30　注6、pp.87-109.

注31　紀元後2世紀から3世紀のころの古代キリスト教の時代の千年王国思想は後千年王国思想であった。それは信徒の具体的な理想の実現の希望であった。なぜならば後千年王国思想とは地上における「神の国」の実現の思想だからである。近藤勝彦『救済史と終末論－組織神学の根本問題３』教文館、2016年、pp.339-340.

注32　R.ラドウィグソン、船喜晃子訳『終末に関する聖書の預言』聖書図書刊行会、1981年、pp.180-181.

注33　1000年への恐れは「紀元1000年神話」を形成した。しかし1000年を過ぎてまもなくイタリアやガリアにおいて、石造りの美しい教会堂が次々と再建されだした。それらの教会堂は全て満足できる状態にあり、再建の必要はなかった。その次の千年世紀である2000年にはパリのノートルダム大聖堂やヴェニスのサン・マルコ大聖堂そしてフィレンツェの大聖堂が修復されている。神原正明『天国と地獄－キリスト教からよ

む世界の終焉』講談社、2000年、pp.40-43.

注34　聖アウグスティヌスの『神の国』の抑圧的な中世の世界観を打破したのは、南イタリアのカンブリア地方出身のフィオーレのヨアキム（1135-1202）である。彼の著した『新約聖書と旧約聖書の調和の書』は黙示録思想を復活させた。暗い中世に代わり「新たな世」への待望が予言された。世界は刷新され聖霊により道徳が完成された時代が到来する。彼の説く第三の時、である聖霊の時代は千年王国に該当する。それが始まる時、すなわち世界の終末の時を1260年と彼は算出した。注27、pp.496-582.

注35　ゲナディオス・スコラリオス大主教は第七千年期の終わりから算出して1466年のキリストの再臨を予言した。これは一連の紀元1500年の恐怖に属する終末思想の一つである。またオルヴィエートは占星術を駆使して世界の終末を占った。稲妻や嵐や風などの天候異変や大きな彗星と六つの星を終末の兆しとして終末の時を算出した。注33、pp.47-48.

注36　注23、p.235.

注37　注33、p.27.

注38　注23、p.345.

注39　注22、p.404.

注40　ジョン・コットンは革命前のロンドンからニューイングランドへ亡命した。彼はニューイングランドのピューリタニズムを代表する人物である。コットンはイングランド国教会を批判して会衆派の教会主義を樹立した。彼は後千年王国論者であった。黙示録のなかに「真の教会」を見いだし、ローマ帝国が分裂した395年から1260年後の1655年に千年王国が開始し、「真の教会」がこの時に完成すると予言した。田村秀夫『千年王国論－イギリス革命思想の源流』研究社、2000年、pp.43-49.

注41　ウィリアム・アスピンウォルは革命前に新大陸のニューイングランドへ亡命し、そこでジョン・コットンから大きな影響を受けた。彼は母国の危機打開のためイングランドへ帰国する。そして革命の中心的な組織である第五王国派の理論家として活躍した。彼は『第五王国の概説』などを著し、現在の第四王国の終末の時を1673年と予言していた。岩井淳『千年王国を夢みた革命－17世紀英米のピューリタン』講談社、1995年、pp.163-174.

注42　ルチアン・ボイア、守矢信明訳『世界の終末－終わりなき歴史』パピルス、1992年、p.108.

注43　注23、p.370.

注44　注28、p.35.

注45　スティーヴン・コーク、高橋和夫、大賀睦夫訳『隠された千年王国』春秋社、2002年、p.48.

注46　内藤正俊『エホバの証人（ものみの塔）－その狂気の構造』青村出版社、1986年、pp.210-223.

第Ⅱ部　ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

第４章　ドイツ表現主義と黙示録思想

注47　啓蒙主義に「プロテストするドイツ」ではロマン主義が台頭する。それは自然宗教や理性宗教に対する歴史的諸宗教の再評価へつながった。ドイツ・ロマン主義はこの歴史認識により歴史世界を再構築し、そのなかにキリスト教を位置付けた。近代ドイツのプロテスタントの神学はこの歴史的幻想の上に成立したものである。それは歴史へ逃避したということもできるだろう。注18、pp.98-116.

注48　敬虔主義では信仰生活における体験的主観的な確信が神を基礎付けている。内面的な敬虔をとおして人間を変革させ「神の国」の実現を目指している。この敬虔主義は『ダニエル書』の終末論の系譜に属している。すなわち『ダニエル書』からフィオーレのヨアキム、オランダのコッツェユースを源泉としている。そして敬虔主義はヴュルテンベルクのヨーハン・アルブレヒト・ベンゲル（1697-1752）を経て18世紀の救済史神学者エーティンガーそして20世紀のクリストフ・ブルームハルト（1842-1919）へ継承されていった。注19、pp.25-75.

注49　注13、pp.118-120.

注50　ヴォルフハルト・パネンベルクは大戦後のドイツ神学において黙示録思想を公然と受け入れた人物である。彼の論文集『歴史としての啓示』では黙示録思想をあらためて受容し、人類の歴史の最後に神の黙示的表象が受容されると説いている。彼は歴史とは終末の様相からのみ解釈しうると結論付けている。注13、pp.120-123.

注51　第一次世界大戦後のドイツの雰囲気のなかで発表された思想は黙示録的である。そこでは世界史の終焉が説かれ、現世に代わる全く新しい世界の到来が告げられている。現実は終末論的な崩壊の予感のもとで否定され、暴力的な秩序の転覆を謀るユートピア的な思想である。そのなかにハイデガーの『存在と時間』も含まれている。その他の代表的な思想家にはエルンスト・ブロッホ、オスヴァルト・シュペングラー、カール・バルト、フランツ・ローゼンツヴァイク、ジェルジ・ルカーチがいる。木田元『ハイデガーの思想』岩波書店、1993年、pp.57-216.

注52　ヴァルター・ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』はアレゴリーの持つ認識論的な意味について論じている。ドイツ悲劇に特徴的な哲学的な構造を明らかにしている。ベンヤミンは現象を構成要素に分解し、理念のもとに再構築し、真理へと救出する。ベンヤミンは現象を「星」に例え、理念を「星座」に例えて、現象から真理を導く思考を「星座の布置」と表現している。理念とは現象の客観的かつ潜在的な配置としての解釈である。そしてその真理は黙示録的な終末の救済思想を意味する。高橋順一『ヴァルター・ベンヤミン－近代の星座』講談社、1991年、pp.91-97.

注53　テオドール・ヴィーゼングルント・アドルノの現体制に反抗する思想は、壊滅していく人間性を、きれぎれの不協和音として表現する。彼のモダニズム芸術の定義では、アンガージュマンが外から破壊しようとする芸術を、アドルノは内部から破壊することを提示している。それは自らが当事者となって自らが置かれた外界への決定的な批判的存在となる。現状況における人間の主体的な統一を全面的に否定することにより、ありうべき統一の世界への逆説的な指標となるのである。音楽家であり哲学者であるアドルノの思想は、自堕落的なニヒリズムを越えてメシア的な終末思想に彩られている。川村二郎『黙示録と牧歌』集英社、1979年、pp.247-248.

第５章　ブルーノ・タウト『都市の冠』と黙示録思想

注54　《聖女バルバラ》について特に新しい解釈が述べられてはいない。Bruno Taut "Die Stadtkrone" Gebr. Mann Verlag, 2002. Nachwort Manfred Speidel, p.26.

注55　父系のキリスト教において、信仰を補完するのが母系の神を演ずる聖母マリアである。聖母マリアは黙示録思想においても一定の役割を担っている。冷酷な父系の神と異なり、聖母マリアは信者の祈りを聞き、信者とともに祈り、恵みを与えてくれる。聖母マリアはひたすら天に向かって祈り、運命を甘受し忍従する。信徒は雛のように聖母マリアのマントのなかに身を寄せ合い奇跡を待つのである。そして使命を自覚し信者に奇跡をもたらすのだ。竹下節子『聖母マリア－〈異端〉から〈女王〉へ』講談社、1998年、pp.104-114.

注56　注54、pp.26-27.

注57　ブルーノ・タウト、本多俊多訳『都市の冠』中央公論美術出版社、2011年、pp.9-12.

注58　注57、p.9.

注59　イングランドのピューリタンの作家であるジョン・バニヤン（1628-1688）が著した『天路歴程』は「滅亡の都」を捨てて「天上の都」を目指す物語である。この試練の旅は神と人の契約に救済を求めたピューリタンの思想をアレゴリー化したものである。しかしこれは水平のユートピアの物語である。深山祐『バニヤンの神学思想 －律法と恩恵をめぐって』南窓社、2011年、pp.10-126.

注60　John Archer MacClung "The Architeture of Paradiese －

Survivals of Eden and Jerusalem" University of California Press, 1983, p.148.

注61　エーリヒ・バロンは政治ジャーナリストであった。彼はブランデンブルク市の社会民主主義系の編集者であった。第一次世界大戦中にバロンはケルン市の衛戍病院に動員されていた。そこでタウトと議論を交わしていた。注57、pp.160-161.

注62　Karin v. Maur "Vom Klang der Bilder, Die Musik in der Kunst des 20. Jahrhunderts" Prestel Verlag, 1985, p.171.

注63　〈歓喜に寄せて〉の詩を書いたシラーはヴュルテンベルク公国のシュトゥットガルト近郊のマールバッハの町の出身である。シラーに大きな影響を及ぼした人物は一家の訪れる教会の牧師であるモーザーであった。モーザーはヴュルテンベルクの生んだ偉大な敬虔主義の神学者であるヨーハン・アルブレヒト・ベンゲル（1697-1752）の弟子であった。シラーはモーザーをとおしてベンゲルの思想に触れていた。〈歓喜に寄せて〉は『ユリウスの神智学』の中に収められている。シラーは霊的な観念の総体を神智学とよんでいた。自然には神が宿るのだ。この『ユリウスの神智学』はシラーの著作集『ユリウスとラファエロの往復書簡』(1785-6)に収められている。フリードリヒ・シラー、石川実訳『招霊妖術師』世界幻想文学大系第 17巻、国書刊行会、1980年、pp.209-211.

注64　ハンス・ゼードルマイヤーが著した『中心の喪失、危機に立つ近代芸術』(1965)のなかでゼードルマイヤーは建築と絵画と彫刻が一体となった空間芸術として中世の教会建築を規範としていた。彼は本来の芸術は建築の空間のもとに絵画と彫刻が統合されたものであると規定し、近代が中心を喪失していくことを憂えているのである。ハンス・ゼードルマイヤー、石川公一訳『中心の喪失、危機に立つ近代芸術』美術出版社、1965年、pp.184-190.

注65　クリスタルハウスのインテリアについて、これを発展させた『曙光』(1920)に掲載された「天の家」はドイツ神秘主義者マイスター・エックハルトの言葉を引用して説明されている。「神が私に献身するなどということを私は決して神に頼んではいない。私が神にお願いするのは、神が私を空虚であり純粋にしてくれることだ。私がそのようになれたならば、自然たる神は私に献身し私の中に自らを閉じるに違いない」このクリスタルハウスでは「世界賛美の圧倒的な感情との一致」が求められている。美以外にこの建築の目的はない。だから内部は空虚なのだ。長谷川章『ブルーノ・タウト研究、ロマン主義から表現主義へ』ブリュッケ、2017年、p.493.

注66　ダヴェンポートは『エゼキエル書』から導き出された九つの正方形に基づきニューヘイヴンの都市空間の骨格を決定した。ニューヘイヴンの正方形の一辺の長さは½マイルとなった。この大きさをヨセフ・メーデの研究を参照して、ダヴェンポートが導きだした。ニューヘイヴンの都市は約800メートル四方である。九つの街区の一辺の長さは261メートルである。このニューヘイヴンという都市は『出エジプト記』のイスラエル人の十二部族の野営天幕の空間構造を新大陸において再現したものなのだ。天上の新エルサレムの十二の門は、ニューヘイヴンでは街路として解釈されている。中央の礼拝所の天幕があった場所は広場になっている。正方形の都市の外郭には小さい正方形の十二辺が並ぶ。この十二はキリスト教における完全数である。新エルサレムの十二の門、十二使徒のイメージがこの都市に重ねられた。この「神の国」の中央の広場の東側にダヴェンポートは居をかまえた。なぜならば十二部族の野営の時に、モーセが中央の礼拝所の東側に天幕を張っていたからである。Vincent Scully, Erik Vogt "Yale in New Haven－Architecture & Urbanism" Yale University New Haven, 2004, pp.13-14, 44-48.

注67　『エゼキエル書』の研究を通してセバスティアン・カスタリオン（Sebastian Castalion）は、1551年にソロモン神殿の平面図を再構築した。正方形の神殿には二十五等分された正方形が中心部にあり、そこが礼拝所となっている。その礼拝所には四方から二重の門としての部屋を通過しないと到達できないような空間構成となっている。この小さい正方形の四倍の大きさの正方形の中庭が四隅に設けられている。結果としてソロモン神殿の空間は、異なった四種類の大きさの正方形により巧みに構成された建築空間となっている。John Archer 'Puritan Town Planning in New Haven' "Jounal of the Society of Architectural Histroians" Vol.XXXIV 34, Nuber 2., May 1975, pp.146-147.

注68 マンフレッド・シュパイデル教授は「都市の冠」の中心部分の正方形について、マンダラとして解釈している。すなわち南インドの仏教寺院の空間構造として、アンコールワットと同じように、神の世界を表現したものであると考えている。こうした根拠のない荒唐無稽な解釈は、欧米の研究者に典型的に認められるものである。注54、pp.22-23, p.28.

注69　カントは1972年に東プロイセンのケーニヒスベルクに生まれている。当時のカントの家庭は、敬虔主義により影響を受けていた。それは篤信的というよりも平凡な勤労者の日常生活のなかから生まれた素朴な信仰としての敬虔主義であった。カントの両親は息子に勤勉で真面目で神聖さを求めた。しかし敬虔主義の最盛期は過ぎており、カントの幼年時代には衰退期に入っていた。浜田義文『若きカントの思想形成』勁草書房、1967年、pp.17-34.

注70　ワイマール共和国時代における予言者の出身地はヴュルテンベルク25%、ハンブルク・アルトナ20%、ベルリン13%、バーデン9%、バイエルン7%、ザクセン6%であった。1918年にヴュルテンベルク王国は崩壊しており社会秩序が混乱しているなかで「神の国」へのキリスト教的な願望が社会主義的な未来国家の信仰と融合していく。ウルリヒ・リンゼ、奥田隆男、八田恭昌、望田幸男訳『ワイマル共和国の予言者たち－ヒトラーへの伏流』ミネルヴァ書房、1989年、pp.73-74、114-116.

注71　ジェルジ・ルカーチ（1885-1929）はハンガリーのユダヤ系の裕福な銀行の頭取の父のもとに生まれている。第一次世界大戦のときに革命家へ転じた。ハンガリーの左翼反対派のサンディカリズムへと傾倒したルカーチはハンガリー革命に身を投じる。それはブルジョア階級の知識人階級を離れてプロレタリアートとともに自己犠牲に生きるべきであるという悲壮感に満ちた信念に基づく人生の苦渋の選択であった。彼は革命思想を明らかに黙示録思想のなかに捉えていた。桜井哲夫『メシアニズムの終焉－社会主義とは何であったか』筑摩書房、1991年、pp.151-153.

注72　注57、p.10.

注73　注57、p.9.

注74　Matthias Schirren "Bruno Taut, Alpine Architektur, Eine Utopie", Prestel Verlag, 2004, pp.15-16.